

ふにあらずんば、我は形なく空しき土塊のみ。汝の恩寵を天より獲き、汝の天界の露に我が心を濡し、地面の水に敬虔の新なる流を通じ給へ。斯くて至善好良の果實を結ぶを得しめ給へ。罪の重荷に壓迫せらるゝ我が心を引き起し、天界を熱望するやう我が心を吸引し、天界の幸福と其の美味とを悟らしめ給へ。地上の物質は之を心に考ふるだに煩はしきを思へばなり。

我を鞭撻して、物質的一時の歡樂より救ひ出し給へ。地上の物質は遺憾なく我を慰め、我が慾望を満たすに足らざればなり。愛の解き難き羈絆を以て、我を汝に結び給へ。汝のみ唯、汝を愛するものを満足せしめ給へばなり。汝在さずば萬物は唯虚無空漠なり。

## 第二十四章

### 他人の生活を窺はんとする好奇心を避く

#### べき事に就きて

我が子よ。好奇心を起す勿れ。而して益なき念慮に煩はさるゝ勿れ。左となり右となる、汝に何の關する所かある。汝は唯我に従へ。此の人兎なり、角なるとも、又彼の人左と説き右と説くとも、汝に何の關する所かある。汝は他の人々に答ふるの要なし。唯汝自ら己を議れ。汝漫に他に關はればこそ、自ら煩累を醸すにあらずや。見よ、我れ何れの人をも好く知れり。而して日の輝く所、我れ其の下に行はるゝ萬物を洞觀す。尙ほ我は萬人の有するものを知る。其の思ふ所、其の望む所、其の企つる所、悉く我に明かならざるなし。故に萬物悉く我に歸せざるべからず。汝は己が平安を守れ。而して動搖するものは、其の望むがまゝに動搖するに任せよ。彼等が説く所、企つる所は、悉く彼等に酬いらるべし。是れ彼等は我を欺くを得ざればなり。

其の名の偉大と、黨與の多きと、衆人の特殊格別の敬慕を受くるとに重きを置

く勿れ。是等は著しく心を混亂せしめ、又頭迷ならしむるものなればなり。汝若し我が往くを勵みて待ち、汝の心の戸を我がために開かば、我は喜びて汝に語り、我が秘密を汝に示すべし。汝謹慎なれ、祈りつゝ望め、而して萬事に就きて自ら謙遜なれ。

## 第二十五章

### 心に平和ある所に眞の靈的進歩あり

我が子よ、我れ曰ふ「我れ平安を汝等に遺す、我が平安を汝等に與ふ、我が與ふる所は、世の與ふる所の如きにあらず」と。平和は萬人の望む所なり。然も眞の平和を得べきの道は、何人も敢て意に留めざるなり。我が平安は謙遜柔和なる心に與へられ、汝の平安は忍耐に依りて得らるべし。汝若し我が語を聞き、我が聲に耳傾けなば、汝は平安のうちに歡樂すべし。

然らば我れ何を爲すべきや、主よ。

何事に依らず先づ己を省みよ。而して汝の行爲と、言語とを省み、汝の全心我を喜ばすことのみに濺がれ、我の外何物をも望み、又求むることなきを期せよ。尙ほ他の言語行爲を漫に審判する勿れ。汝に委ねられざる事に、自ら煩はさるゝ勿れ。斯くて汝の煩累は滅却するを得べきなり。

何物にも拘束せらるゝ勿れ、又心身共に煩はさるゝ勿れ、此の世の事に關與する勿れ、唯永遠の安息に關することに思を馳せよ。故に汝の心に煩悶を感ぜざるに至らざる限りは、眞の平安を有するものと思惟する勿れ。窮乏にありて更に困憊せざるに至るまでは、汝に平安ある能はず、萬事汝の希望のまゝに成るまでは、未だ完全なりと言ふを得ず。汝美はしく且つ敬虔の念に満つるまでは、己を餘りに高しと爲す勿れ、又特殊の恩寵を受けたるものと思ふ勿れ。蓋し斯かる事に依り其の徳を慕ふの狀は測られず、又靈的圓滿の進歩は斯かる事に依りて生ずるに

あらず。

然らば如何なるものに依りて生ずべきか、嗚呼主よ。

汝全く己を棄て、其の全心を神の聖旨みことばに委ねよ。其の大事となく小事となく、暫時となく永遠となく、決して汝自らの利益を求むる勿れ。然らば汝は其の得意なると窮乏とに論なく、等しき思を以て萬事に當りつゝ、絶えず感謝を以て、常に同一の状態に居るを得ん。汝慰藉を奪はるゝときも、尙ほ更に大なる苦痛に當り得る心を準備し能ふまで、剛毅に満ち、希望を持して堅忍なるを期せよ。而して恰かも身に忍ぶべき苦痛なきが如くに、己を正義と爲さざるを期せよ。唯我が汝に加ふる所に従ひて我を義たゞしとし、我が名を讚美するを忘るゝ勿れ。然らば汝始めて我が平安に赴く眞實にして誤なき道を踏み、限りなき歡喜を以て再び我が面を仰ぐの希望を生ずべし。汝今眞に己を卑むの域に達せば、汝が此の假の世に於て受くべき限りの平安に溢れつゝ歡喜するを得ん。

## 第二十六章

超越せる心は研究よりは謙遜なる祈禱に  
依りて直ちに與へらるべきに就きて

嗚呼主よ。天界に關する思想に絶えず精神を集注し、煩累を感ぜずして叢がる煩累の間を通過するは圓滿なる人の事業なり。然も是れ其の感覺の缺如せるがためにあらず、其の心の超然たるがため、地上の何物にも其の情緒を吸引せられざるに由れり。

我は汝を求む。恵みに富み給ふ我が神よ。世のあらゆる煩累より我を護り給へ。然らずんば我は將に之がために拘束せられんとす。肉體の種々の束縛より、我を自由ならしめ給へ。然らずんば我れ將に歡樂の係蹄に足を奪はれんとす。我が靈魂に障礙を與ふるものより救ひ給へ。然らずんば羈絆に纏綿せられつゝ我れ將に

克服せられんとす。我は此の世の虚榮より、頻に慾望する事物に就きて敢て求むるにあらず。寧ろ汝の僕の靈魂に障礙を興へ、之を墮落せしめ、常に其の靈性の自由を奪ふ事物よりして、刑罰と滅亡の原因との齎さるゝ秘義を知らんことを求む。

嗚呼我が神よ、汝絶對至善の神よ。永遠の事物を愛する念を我より奪ひ、好悪なる志を以て、此の世のものに執着せしむる此の肉的歡樂を轉じて、我に苦がきものたらしめ給へ。我を失敗せしめ給ふ勿れ。嗚呼主よ。我をして肉と血とのために敗ることなからしめ給へ、此の世と、よじなき名譽とに欺かるゝことなからしめ給へ。惡魔と其の老獪なる詐術とに捕捉せらるゝことなからしめ給へ。此の世の歡樂に代へて、汝の聖靈より來る至美至善の賜を我に興へ、肉的執着に代ふるに、汝の聖名に對する欽仰の念を我が心に漲ぎ給へ。

見そなはし給へ。飲料、食物、衣服、其の他肉體に供給する需用は敬虔篤信な

る靈性に取りて煩累なり。是等は節抑して用ゐつゝ、敢て之が慾望のために纏綿せらるゝことなからしめ給へ。萬物悉く放棄するは勿論道に適はざるなり。之に據りて肉體を支へざるべからず。然れども奢侈なるもの、單に快樂のためなるものを求むるは潔き律法の禁ずる所なり。蓋し肉は忽ちに靈に反抗謀叛するを以てなり。故に我れ汝に求む。汝の聖手<sup>みて</sup>我を支配し、尙ほ我を教へ、我をして何者にも服せらるゝことなからしめ給はんことを。

## 第二十七章

至善に止まらしめざる最も力ある障礙は

自己を愛する念なること

我が子よ。汝萬物を棄て、自ら何物をも有せざるを要す。此の世の何物にも勝りて汝を傷ふものは己を愛するの念なるを記憶せよ。汝が物を愛するの程度に

準じて、汝の之に執着するの念は増減す。汝若し淳潔、單純、秩序を愛せば、汝は羈絆を脱却するを得べし。之を有すること道に適はざるものは貪ること勿れ。汝に障礙を興へ、汝の心の自由を奪ふものを求むる勿れ。汝が有する所又望む所のものに對すると等しき念慮を以て、汝が心の底より全く我に信賴する能はざるは怪むべきなり。

何故に汝は益なき憂愁に自ら沈むや。何故に汝は要なき煩累に困憊するや。汝の善良なる精神を我に委ねよ。汝傷はるゝことなかるべし。汝之を求めなば、此處にあり、彼を求めなば、彼處にあるべく、汝自らの利益と快樂とを求めなば、心に平和を得る能はず、又煩累より脱却すること能はざるなり。是れ汝は何れの場合に於ても何物か缺如する所あり、何れの所に赴くとも汝を十字架に釘くるものあるべければなり。故に汝は是等の物質を得んことゝ富まんことは禍なり。奪る之を輕んじ、汝の心より之を悉く抹殺するを利なりとす。汝の所得財産のみなら

ず、名譽を渴望し、益なき讚辭を求むる念を放棄しつゝ、是等は皆悉く此の世と共に滅亡するものなるを悟らざるべからず。若し篤信の精神缺如せば、其の遁るゝの場所なく、他に求むる所なき平和は長く保つに由なかるべし。汝の心の如に眞の泉の灌がれずば、即ち我に忠信堅實に立つにあらずば、汝は忽ちに轉倒して、幸福なる能はざるなり。斯かる機會の汝を誘ふものあらば、須らく之を蹂躪せよ。汝は平和なるべく又愈安全に進むを得ん。

淳潔なる心と天來の智識とを求むる祈禱

嗚呼神よ。汝の恩寵に依りて我を勵まし給へ。内なる人に力を授けて我を勵まし、要なき煩累苦悶を我が心より取り去りて、其の價の輕重如何に拘はらず、敢て慾望にも拘束せられず、忽ち消失する物質及び之と等しく消亡すべき我れ自らに眼を留むることなからしめ給へ。蓋し日の下にある何物か陰ならざるものあらん、而して虚無且つ靈性の煩累たらざるものあらんや。斯く之を遠觀するものは

如何に幸福なるかな。

天來の智識を我に與へ給へ。而して萬物に越えて汝を求め、之を發見するの道を教へ、萬物に越えて汝を喜び、汝を愛し、汝の敏き支配に従ひて、萬物の實相を觀取し得るの道を教へ給へ。諂諛者を避くるの謹慎と、反對者の攻撃を忍ぶの力とを我に與へ給へ。蓋し言語の風に搖がせられず、諂諛者に耳を藉さず、其の素志を堅實に履行するには、限りなき智識を要するを以てなり。

## 第二十八章

### 讒謗者の毒舌に對して

我が子よ。汝を傷け、汝の聞くを好まざる所を、汝に言ふものありとも悲じ勿れ。汝自ら嚴に己を議れ。而して人の汝を惡むこと、汝自ら己を惡むよりも、まだしからしむる勿れ。汝靈的生活を送らば、其の紛々たる人の言語に重きを置く

ことなかるべし。失意の時に於て緘黙を守り、汝の心を我にのみ轉じて、人の批判に煩はせざるは容易の業にあらず。

汝の平安を人の言語に求むる勿れ。蓋し他に依りて賞せらるゝも將た貶せらるゝも、汝自らの眞の價値に消長あるべき理なし。眞の光榮と眞の平安とは何處にありや。是れ悉く我に存するにあらざる乎。人の讚辭に意を留めず、人の侮辱を怖れざるものは、搖がざるの平安を有せん。總ての不安と昏迷とは道ならざるを愛し、要なきを怖るゝに起るなり。

## 第二十九章

### 艱難身に臨むの際如何にして神を求め

#### 又神を祝福すべきや

汝の聖名に永遠の榮光あれ、嗚呼主よ。我に此の誘惑あり、此の艱難あるは、

汝の聖旨みことばなればなり。我は是より免るゝを得ず。唯汝に遁れ、汝の祐助を求めて之を幸福たらしめ給はんことを願ふのみ。主よ、我れ今苦痛のうちに在り、是れ我に好ましからず。我れ此の現下の懊惱あうなうに煩ふ。今我れ何をか言はん。噫愛する父よ。我は惑へり。汝此の時より我を救ひ給へ。故に我れ深く謙遜けんそんならざるを得ず、又汝に依りて救はるゝのとき、殊に汝の榮光を讚美すべき場合に立てり。我を救ふを以て汝の喜たらしめ給へ、主よ。我は唯弱きものなり、我れ何かを爲し得んや。尙ほ汝の外何處にか我れ往かんや。忍耐を我に與へ給へ、嗚呼主よ。今此の惑へるのとき、我を助け給へ、我が神よ。然れば其の苦痛の如何に慘憺さんたんなりとも我れ怖れざるべし。

而して今此の煩累わんるいの間にありて我れ何をか言はんや。主よ、汝の聖旨みことばを成就せしめ給へ。我れ能く苦痛と悲惨とを背めたり。我れ當に之を忍ばざる可らず。あゝ暴風は過ぎ、前よりも更に穩かなるまで、我れ忍んで耐へざる可らず。然れど

も汝の全能の聖手は、我が將に蹂躪しゅうりつせられんとする誘惑を我より放ち、此の暴戾ぼうれいなるものを緩和せしむる力を有し給ふ。曾て汝は屢我に斯く爲し給へり。嗚呼我が神、我が慈愛者よ、我に愈困難なるものは、汝に取りては更に愈容易なり。汝の右の聖手みぎは之を還すの力あり。

### 第三十章

#### 神の攝理に甘んじ恩寵を回復すべき信頼に就きて

我が子よ。我は艱難げんなんに際して、汝に力を與ふべき主なり。汝苦むのとき我に來れ。汝自ら祈禱いたせんと思ひ起さることを汝が天來の慰藉げんじを全く缺く大なる理由なれ。汝は熱心我に求むるの前、既に多くの歡樂を求め、物質に依りて慰藉を受けんとす。而して我は是れ我を信ずるもの、隠れ家、我の外に、全能なる援護者な

く、有利なる顧問なく、又永遠の贖償者なきを汝の思ひ起すまで、汝何處に往くとも更に汝に利あることなし。然れども今暴風過ぎて汝呼吸を回復したれば、我が憐の光明に依りて力を得よ。我は總ての人を祐くるに速なり。(と主は宣ふ)。而して之を祐くるの方法に遺憾なきのみならず、裕にして且つ其の力を加ふるなり。

我に取りて困難なりと爲すべきもの世にありや。將た又一度約束せし所を我が完成せざるものありや。汝の信念安くにありや。堅忍不拔勇を鼓して耐へよ。慰藉は立所に汝に来るべし。我は言ふ、我を俟ち望め。我往きて汝を癒すべし。汝を苦むるは誘惑の爲す業なり。汝を脅かすものは虚偽の恐怖なり。汝に向ひて來る未來に就きて煩ふ勿れ。悲むべきを唯悲め。『一日の苦勞は一日にて足れり』。多く豫期に反すべき將來に就きて或は煩ひ、或は喜ぶとも何の益かある。何の利する所かある。

然れども斯かる想像に眩惑せらるゝは人の通態なり。是れ其の志向は薄弱にして、仇敵の暗示に容易く轉倒せらるゝの證據なり。汝の仇敵は汝を惑はし欺くがためには、其の事態の真或は偽、物質に對する執着或は未來に對する恐怖等を以てするに擇ぶ所なし。故に汝の心を之に類はしむる勿れ、又怖れしむる勿れ。唯我を信ぜよ。唯我が慈愛に信頼せよ。汝が我れ甚だ遠しと自ら思ふとき、我は却つて最も汝に近きなり。汝自ら悉皆失ひたりと判ずるとき、却つて最大の褒賞は汝に加へられんとする際に在るなり。設令一事汝を離れ去るとも、是れ決して萬物を失ふ所以にあらず。汝が須臾の間の感情に従ひて、或は悲み、或は又之に沮喪する勿れ。窮迫免るゝの希望全く絶ゆるが如く、又洋々たる希望は與へらるべし。我れ汝に艱難を與ふることあり、又汝が熱望する歡樂をすら奪ふことありとも決して己を忘るゝまでに絶望する勿れ。是ぞ天の王國に赴くの道程なればなり。汝の慾望する所を悉く與へられんよりは、寧ろ窮乏を以て訓練せらるゝは、汝に



對し又他の我が僕に對して、極めて益あること疑ふべからず。我は汝の秘めたる心を知れり。而して汝の靈的歡樂を暫し奪はるゝは汝に益なるべし。然らずんば汝の得意の狀態に自負しつゝ、自ら其の價値なきに尙ほ歡樂せんことを求むべきを以てなり。我が與へたるものは又我れ之を奪ふの力あり。而して我が欲するまゝに再び之を與ふるの力あり。

我れ縦し之を與ふるも尙ほ是れ我が有なり、又我れ之を奪ふも一つも汝の有存せざるなり。蓋し至善無缺の賜は悉く是れ我が有なればなり。我れ汝に苦痛を與ふとも、又如何なる十字架を負はしむとも更に絶望する勿れ、又汝の心を沮喪せしむる勿れ。我れ立所に汝を救ひ、汝の煩悶を歡樂に轉ぜしむるなり。假令汝を遇する斯くの如きるときにも、我は尙ほ讚美せらるべし義しくして又大なるものなり。

汝若し聰明にして之を思ふの道を過たずんば、如何なる窮乏にも失望しつゝ、

くことなかるべく、寧ろ喜び樂みて感謝するを忘るゝことなかるべし。然り、我れ悲痛を以て汝を苦め、汝を免すことなくとも、汝は之を以て汝が特殊の歡樂と思ひ做すべきなり。『父の我を愛し給ふ如く、我れ汝を愛す』と。我れ曾て我が愛せし弟子に告げたり。而して我は彼等に此の世の歡樂を與へざりき。却つて大なる苦痛を與へたり。名譽にあらずして侮辱、遊逸にあらずして勞苦、安眠にあらずして、忍びつゝ多くの果を結ぶべきを命じたり。汝是等の語を記憶せよ嗚呼我が子よ。

### 第三十一章

創造主を發見せんがため、萬物悉く  
輕んずべきことに就きて

嗚呼主よ。汝若し人或は物質の、我を妨げざる域に達せんことを我に求め給はざらば、

我は尙ほ汝の恩寵を拵に與へられざるべからず。我れ何物にか虜へらるゝ間は、絶えて汝に向ふべき自由を得ず。自由に汝へ翔り行かんと欲するものは言ひぬ、願くば鶴の如き羽翼のあらんことを、さらば我れ飛去りて平安を得ん』と。眼の明瞭なるに勝る平安ありや。地上の何物にも束縛せられざるに勝る自由の人ありや。故に人は總ての物質に超然たらざるべからず。且つ全く己を擲ち、心は汝に對する神典に己を忘れ、物質の間に身を置きつゝ、汝の外に物なきを思はざるべからず。地上の物質より全く脱却したるものにあらずんば、未だ以て靈界の物體を悟る能はざるなり。故に冥想すること少きものは、物質即ち滅亡すべきものを擲つ力も亦少し。

此の域に達せんには靈魂を向上せしむべき裕なる恩寵を被らざるべからず。而して超然として己に超越して靈魂を運ばざるべからず。人若し靈性音調し、萬物のと絆を脱却し、神と全く合一するにあらずんば、如何に智識あり、又如何なるもの

有すとも、之を數ふるに足らざるなり。其の何物たるを問はず、唯一絶対無限の神を措き、物質を偉大なりとして重んずるものは、有する所豊なる能はず、又躊躇匍匐するの外なきなり。神にあらざるもの悉く皆虛無のものにして、其の影あるも尙ほ虛無なりと解せざるべからず。夫れ敬虔にして神に啓發せらるゝ人の智識と、唯博覽碩學の人の智識の間には、甚だ顯著なる相違あり。神の感化の下に天より與へらるゝ智識は、人の才智に依り、努力奮勵して得たる智識に勝りて甚だ貴し。

冥想せんことを望むものは頗る多し。然も彼等は之に必要なる修養を爲すに努めざるなり。幻影に満足し、物質に安んじ、敢て完全なる制慾を爲さざるものは、到底巨大なる障礙を免るゝ能はず。我は如何なる靈に依りて導かるゝかを自ら知る能はず、又如何に欺かるゝかを自ら知る能はず。靈的なりと思考せられつゝ、尙ほ我等に甚だしき苦痛となり、須臾の間に滅亡すべき卑しき物質に對して、不安の念を醸すものに會しては、我等は深く反省沈思すること甚だ稀なり。

悲むべし。我等は忽卒なる思慮に従ひて、忽ち外部の物質に暴進して、敢て誠心誠意己の行爲を自ら批判することなし。我等は己が情熱に欺かるゝの警誡を怠り、又我等の行爲に存する不潔を絶えて悲まざるなり。「肉は其の道を失へり」故に著しき虚偽に心を蝕はれて悟らざるなり。故に其の肉的情熱の墮落に伴ひて、意志の力の缺乏の證據たる行爲の墮落は、到底免るゝを得ざるなり。心淨潔にして、始めて善良なる生活の結果は現るゝなり。

我等は人の行爲の量に従ひて之を判断し、其の行爲の動機を誠實に考察することなし。我等は勇氣、富有、美貌、手練等又之を能くし、歌に巧に、勞役に能く服する等の標準を以て人を議る。然れども如何に靈性に於て貧しきか、如何に忍耐柔和なるか、如何に敬虔にして靈的なるか等に就きて議ること稀なり、野性は人の外貌にある所を貴ばしむ。恩寵は萬事を人の心に向はしむ。一は常に失望を斷し、他は神を信頼して敢て欺かるゝなし。

### 第三十二章

#### 自制と總ての情慾を棄つべきことに就きて

我が子よ。汝全く己を棄つるにあらずんば、眞の自由を得ること能はざるなり。己が利のみを求め、己を愛するものは鐵鎖に繋がるゝなり。貪婪なるものは好奇心に満ち、漂浪安んずる所なく、絶えず遊逸快樂を求め、耶穌基督に就きて考ふる所なく、堅忍持久する能はざる企圖のみを事とす。神にあらざるものは悉く皆滅亡せざるべからず。次の語短くして意義深長なる誠を記憶せよ。「總てを棄てよ。然らば汝等總てを得べし」と。之を遵奉せよ。汝平安を得べし。之を熱慮せよ。而して汝之を實行せるとき、始めて其の意義を了解せん。

嗚呼主よ、是れ一日の事業にあらず、又兒戯にあらず。然り、此の短き一語のうち、圓滿に赴く有ゆる道を含めり。

我が子よ。汝此の圓滿に進むの道を開き、逡巡する勿れ、又轉倒する勿れ。寧ろ高遠の域に向つて突進せよ。せめては渴望して之を求むるの志を揮ひ起せ。我は汝が既に己を棄て、我が指揮のみを唯目標とし、又汝を支配する師父として、我が推察せるもの、指揮に従ひて立つの域に達せんことを汝に望む。汝尙ほ離るべき多くのものを有せり。而して汝之を悉く我に委ねたるにあらずば、汝が熱望する域に達する能はざるなり。『我れ汝に勸む、汝富を成さんために、我より火に燬きたる金を買へ』。是れぞ地上の物質を悉く脚下に蹂躙する天界の智識なり。此の世の智識を以て處理する勿れ、又他をも己をも喜ばずに努むる勿れ。

我れ曰ふ。人の間に價あり、貴く見ゆるものを賣りて、價なきものを求めざるべからずと。是れ天界眞の智識は、敢て自ら誇らず、又地上に於て秀れんことを求めざるを以て、人の間にありては其だ價なく、著しきものなく、殆ど忘却せらるるを常とす。多くの人は其の唇を以て之を賞讃す。而して彼等の生活は之を離るること遠き

なり。然も多くの人々に秘めらるるは、尙ほ是れ價高き眞珠たるの實を失はず。

### 第三十三章

心の動搖と、終局の目的を神に置くべき

ことに就きて

我が子よ。汝が現在の感覺を信據する勿れ。是れ汝が今有する所は、忽ちにして或る他の状態に變化すべきを以てなり。汝の息ある間は、汝に己が意志にすら反する變轉恆なきものなり。喜ありと思ふ間に悲み來り、或は時に平安にして時に困惑、或は時に敬虔にして、又時に不虔、或は時に勤勉にして、又時に怠慢、或は時に嚴にして時に寛となり、終始定まるるときあらず。然れども聰明能く聖靈に啓導せらるるものは、是等の變轉に超然として堅く立ち、自らの感覺に拘泥せず、又浮薄の風は何れに吹くとも意に介せず、其の心の向ふ所は全く正義と最良の目的にあるを期せり。

るべからず。斯くて千態萬様定めなき出来事の間に投じて、其の眼を絶えず我に注ぎつゝ、専心一意鞏固なるを得べきなり。

心の眼の淳潔愈其の度を加ふるに従ひて、人は身に迫る諸種の暴風の間に愈搖ぎなく通過するを得るなり。心の眼右顧左眴轉々するに至れば、其の前程愈明瞭たるに至るべし。是れ其の會する所の快樂的方面に向ひて、忽ちに吸引せらるゝが故なり。蓋し自己の利を求むる弊害を全く棄却し得る人は、到底發見し得べきにあらず。昔猶太人は常に耶蘇に見えんがためのみならず、又ラザロにも會はんがために、マルタ、マリヤの許に來れり。故に我等が心の眼は常に單純正當ならんがため、愈淳潔となり、周圍に來る種々なる此の世の目的を全く離れて、遙に我に注がれざるべからず。

### 第三十四章

神を愛する者のためには、神は萬物に

勝りて貴く、又萬物のために貴し

「見そなはし給へ、我が神、我が至愛の神よ。我れ此の外何をか望み、之に勝ぐる如何なる幸福をか願はん。嗚呼美はしくも、亦歎ばしき道よ。世界にあらず、將た世にある物質にあらず、唯道のみこそ愛すべきなれ。」我が神よ、我が至愛の神よ。悟りを得たるものには、此の語にて既に十分なり。此の語を反復すること、神を愛するもの、唯一の歡喜なれ。是れ汝在せば、萬事悉く喜となり、汝退き給ひては、物一つとして煩累たらざるはなし。汝は心を鎮靜せしめ、搖ぎなき平和を與へ、又歡樂喜悅を與へ給ふ。汝は萬物を用ひて我等を喜ばしめ、又萬物のために汝を讚美せしめ給ふ。汝無くんば何物か長く喜ぶべきものあらんや。然れば唯樂しく謝すべきは、汝が常に恩寵を給ひ、尙ほ汝の智慧に従ひ、時期を見ては賜を與へ給ふにあり。汝を眞に味ひ得るものに向つて何物か試むるに樂しきものなからんや。汝を眞に味ひ得ざるものに取りては何物か樂しきものあらんや。然れども此の世の智者と肉慾

に美はしきものを味ふ人々とは、汝の智慧に富むを得ず。蓋し前者は虚榮を得べく、後者は既に死を得べきを以てなり。然れども此の世の物質を輕んじ、肉情を抑制して汝に従ふものは眞の智慧に達するを得べし。是れ虚榮より眞理に移され、肉より靈に轉せしめらるゝが故なり。斯かる人々は神を味ひ、又其の物質に於て發見せらるゝ善事を悉く其の創造者に歸して讚美するなり。偉大なる、然り、眞に偉大なる差異は、創造主と物質、永遠と時間、永劫の光明と其の光明を反映する光明との間に存せずんばあらず。

嗚呼汝、有ゆる造られし光明に超越したる永遠の光明よ。天より汝の光明の赫奕たる閃きを送りて、我が心の奥底を照し給へ。我れ歡喜と勝利とに充ち満ちて汝を眷戀し得るに至るやう、光明の總ての力に依りて、我が靈性を潔め、喜ばしめ、啓發し、鼓舞し給へ。此の幸福且つ熱望すべき時期の來るとき汝は、汝の在すに依りて、我を満ち足らしめ、又汝は我が至善至愛の神となり給ふべし。之が與へられざる間

は、我に完き歡喜あることなし。然も悲むべし、舊き人尙ほ我がうちにあり、彼尙ほ十字架に釘けられず、彼、尙ほ死せず。彼、尙ほ聖靈に反抗して暴力を逞うし、心裡に争闘を起さしめ、我が心の王國に平和を與ふるを許さざるなり。

然れども汝は海の勢力を支配し、此處に荒ぶる濤を鎮め給ふ。願くば起ちて我を助け給へ。戰を好む諸族を散亂せしめ、汝の力に依りて彼等を粉碎し給へ。汝の偉力を示し給へ。我れ汝を求む。汝の右の聖手に榮光あらしめ給へ、蓋し汝の外我に希望なく、我が隱家あらざればなり。嗚呼我が主、我が神よ。

### 第三十五章

此の世に於ては誘惑より遁るゝ能はず

我が子よ。汝此の世に在りて決して安堵すべからず。汝の生ける間は、汝常に靈の甲冑を脱ぐ能はず。汝は仇敵の中間に立てり。而して右に往くも左に向ふも攻撃

せられざるを得ず。故に汝若し忍耐てふ楯もて四方を防ぐにあらずば、必ず長く傷なき能はざるなり。雷に之のみならず、汝若し我がために如何なる事をも忍びて負ふを誠意歡喜しつゝ、我に汝の心を堅く結ぶにあらずんば、汝は到底此の戦闘の辛酸に耐ふるを得ざるべく、又祝すべき勝利を得る能はざるなり。故に汝は萬難を排し、汝に抗する如何なる暴力にも打ち克ちつゝ、丈夫の如く進まざるべからず。勝利を得たるものには糧食を給せられ、怠惰なるものには愈多くの辛苦伴ふべし。

汝若し此の世に於て安息を求めなば、如何にしてか永遠の安息を獲得するを得んや。安息せんことに心を轉ずる勿れ。唯忍耐せよ。眞の平安を求めよ。但し地上に於けるにあらず、天上に於て、人或は物質に於けるにあらず神にありてのみ之を求めよ。蓋し神を愛するためには汝有ゆる艱難に喜びて當らざるべからず。即ち勞苦、悲愁、誘惑、煩悶、憂慮、窮乏、轉變、災害、侮辱、非難、謙遜、羞耻、懲戒、懊惱是れなり。此等は徳を樹つるの助けとなり、基督に抱かるゝ嬰兒の訓練となり、天

上の冕冠を編成するものなり。我は些少の勞役に對して、永遠の褒賞を酬い、暫くの耻辱に對して不易の榮光を授くるなり。

汝は絶えず靈的慰藉を心に有するを期するや。我が聖徒は常に之を有せしなり。然も彼等は、多くの苦痛と慘憺たる誘惑と、又大いなる懊惱とを有したり。唯彼等は忍んで之に耐へ、懸て與へらるべき榮光に比ぶれば、此の暫くの苦痛は數ふるにも足らざるを知りて、己を棄て、神を信ぜり。多くの人々は血涙を流きつゝ、拮据奮勵辛うじて得たる所を、汝は直ちに之を得んと欲するか。主を待ち望め、丈夫の如く己を處せよ、而して勇氣に充ちよ、沮喪する勿れ、汝の持場を退く勿れ、唯神の榮光のため、心身共に忠實に放擲せよ。我れ大なる智慧を汝に與へ、又其の如何なる艱難の際に汝と偕に在るべし。

## 人の益なき批判を意に介する勿れ

我が子よ。汝の心を主に委ねよ。良心だに汝が義務に忠實にして無垢なるを證せば、敢て人の批判を畏るゝ勿れ。斯かる苦痛は美はしく又幸なり。而して是れ神を信するの外、他を信ぜざる謙遜なるものゝ心を苦むるに足らざるなり、人々は唯饒舌の資料の多からんことを求む。故に之を信するに足らざるなり、尙ほ且つ總ての人を満足せしむるは到底不可能の業なり。パウロは主を喜ばさんがために其の全力を獻げ、總ての人々に對して、己が全力を盡したり。然も人は偉大なるものとは批判せざりしなり。

パウロは其の身を委ねたる人々の救養救拯に力を盡し、又其の力を十分に有せしなり。然も彼も亦人の批判と侮辱とを避くる能はざりしなり。故に彼は總てを知り給ふ神に萬事を委ねたり。而して忍耐と謙遜とを以て、虚榮虚偽の思想、彼に對する毒舌、誇張したる風評等に對して自ら護れり。時として彼は反駁を試みたりと雖も、是

れ弱きものゝ彼が沈黙に因りて躓くべきを察したればなり。

汝何者なれば滅ぶべき人を畏るゝや。今日此處に在る彼、明日は即ち見るべからざるなり。神を畏れよ。汝人に對する恐怖に戦く要なきなり。如何なる人の言語、讒謗が汝を害し得べきや。是れ汝を害せんよりは寧ろ己を傷ふなり。而して彼、何人たりとも、神の審判を避くる能はざるなり。汝の眼前に神を置け、而して反覆常なき語に係はる勿れ。縦し現在にありて汝を害し、耻辱を到底免るゝ能はずとも、之に由りて歎息する勿れ、又漫に深慮を缺きて、汝の冕冠を失ふ勿れ。唯汝の眼を天上の我に漲げ、我は總ての耻辱害惡より汝を救ひ、其の行爲に準じて總ての人に酬ゆるの力あり。

## 第三十七章

内心の自由を獲得するの淳潔完全なる



## 忍従に就きて

我が子よ。汝己を棄てよ、始めて我を發見せん。自己のために何事をも擇ぶ勿れ。又何物をも求むる勿れ。斯くて始めて絶えず賜を得べきなり。汝が己を棄て、汝の主張を擲るとき、汝は更に裕なる恩寵の加へらるゝを見るべし。

主よ、何れのとゞ己を棄て、又如何にして己を擲つを得べきや。

常に、又絶えず、大事に於けるが如く、小事に於ても等しく汝が何物をも有せず、萬物を脱却するを我れ汝に望む。且つ汝其の心に於ても行に於ても、全く汝の自己に超越するにあらずんば、如何にしてか我れ汝のものとなり、汝我がものとなるを得んや。汝の之を爲すの遲速は汝の消長に關し、汝の之を行ふ愈深く、愈誠實にして、我が汝を嘉する事愈厚からん。而して汝の得る所も従つて多からん。

或は己を棄つると同時に、野心を抱くものあり。蓋し彼等は神を信ずること完からざるが故に、如何にして己のために畫策すべきかを考慮するなり。又或は一時は

總てを獻ぐるも、誘惑に導かれて再び己が道に歸するものあり。之がために其の徳性更に進歩することなし。是等は到底淳潔なる心の眞の平和を得ること能はず。又我と美はしき友情を保つを得ず。先づ絶對に己を棄て、日々服従するにあらずんば、之を得る能はざるなり。又之無くんば著しき結果の齎さるべき我との合一あることなく、又あり能はざるなり。

我れ屢汝に告げしが、今復た汝に告ぐ。己を去れ、己を棄てよ、然らば汝心に著しき平和を得て喜ぶべし。萬事を悉く獻げよ。何物をも求むる勿れ。何物をも惜む勿れ。惑なく、堅固なる信念を我に置け。斯くて汝は我を有するを得ん。而して其の心に自由あり、暗は全く拂ひ盡さるゝを得ん。之を汝が全力を盡すの事業とし、汝の祈禱とし、汝の熱望たらしめよ。悉く己を棄つるに因りて、全く耶蘇イエズスに従ふを得べく、己の死するに従ひて我と偕に永遠に生くるを得べし。斯くて總ての妄想、擾亂、益なき憂慮は消散すべし。斯くて又不安恐怖は汝を離れ、道ならざる煩惱は

全く死するを得べし。

### 第三十八章

此の世にありて好く己を處理する事並に

危険に際して神に遁るべきに就きて

我が子よ、汝何れの場合にも、何れの行爲にも、又總て此の世の事業に努むること甚だ勤勉ならざるべからず。斯くて始めて心に自由あり。己を意のままに支配し得べく、萬事手に従つて處理せられ、何事も汝を拘束するものなかるべし。汝己が行爲を支配する王者、主人たらざるべからず、決して其の從僕、傭人たる勿れ。神の子たるの運命と自由を有するに適はしき自由の人、眞の希伯來人<sup>ヘブライ人</sup>たらざるべからず。(譯者註、希伯來人即ち神の選民)斯かる人々は物質に超越して永遠の事に合一するを得るなり。彼等は假の物質を左の眼に見ると同時に、右の眼は既に天界の事物に注ぐなり。而し

て假の物質は、決して其の心を執着せしむる能はず。假の物質は却つて彼等に事へ、秩序を以て萬物を創造せる神に依りて秩序を整へられ、又之を處理せらるゝ如く彼等に用ゐらるゝなり。

汝若し萬物に執着せず、其の肉感に依りて見聞し、又肉情より求むるものを貴ぶことなくば、汝は絶えずモウゼと共に幕屋のうちに入り、主の商識に與り、神の聖旨を常に聞き、此の世並に後の世に關する諸種の事柄に就きて啓示せらるゝを得べきなり。蓋しモウゼは疑義難題ある毎に幕屋に通れ、人々より危険攻撃を被る毎に救助を祈らんがために此處に隠るゝを常としたり。汝も等しく汝の心の室に通れ、神の恩恵を熱切に哀求せざるべからず。斯かる際にありてヨシユアとイスラエルの子孫とはギベオンの民に欺かれたるを會て我等は讀めり。蓋し彼等は主の語を求めず、漫に敵の甘言を信じ、其の虚偽の仁恵に眩まされたるがためなり。

## 第三十九章

## 人は事業に就きて煩悶すべからざる事

我が子よ。汝の運命を悉く我に委ねよ。我れ適當なる時を量りて之を處理すべし。我が處置を得て、汝必ず汝に益あるを發見せん。

嗚呼主よ、我は歡喜唯萬事を汝に委ぬ。我れ之に煩ふとも、何の益なきを知ればなり。我れ若し未來に就きて求むる所なくんば知らず、今は唯汝の惜みなく、汝の喜び給ふがまゝに己を棄つるなり。

我が子よ。時として己が慾望のために激烈なる苦悶を爲すものあり、然も一たび之を得れば、又忽ちに其の心他を願ふ。蓋し人の慾情は一定の目的に常に止まる能はず、轉々之を驅り行けばなり。故に如何なる些事にも己を委ぬるは、損する所決して少からざるなり。

人の眞の利益は己を棄つるに勝るものあらず。己を棄つるものは大いなる自由と平安の生涯を送り得べし。然も人の爲さんとする善事に反抗する老猾なる仇敵は、能ふべくんば人を騙欺の係蹄に陥れんとして四時之を誘惑し、策を設けて日夜に之を詐り、謹慎を破らんとして待てり。故に『惑に入らぬやう、汝等眼を醒し、且つ祈れ』と我等の主は宣ふ。

## 第四十章

## 人は何の善き物をも自ら有せず、又賞すべき何をも有せざることに就きて

主よ。汝の常に聖旨みことばに留め、又汝の之を訪なひ給ふ人の子は、果して如何なるものなりや。汝が慈愛を垂れ給はざるべからざる人に何をか有する。汝我を棄て給ふとも、我れ將た何の咄くべき理由をか有せんや。或は汝我が熱望する所を與へ給は

ずとも、我れ將た之に對して何をか逆ふの權利あるべき。我は唯眞に斯く思ひ、又斯く言はざるべからず。曰く我は虚無のみ。我は能ふ所なし。我は自ら何物をも所  
有せず。我は萬事に缺如し、又曾て何事をも企てたることなし。汝若し我を祐け、  
而して我が心を啓導し給ふにあらずんば、我は唯不信仰と不謹慎とに赴くの外なき  
なり。

然も、嗚呼主よ、汝は常に不變なり、永久に忍び、常に善、義、又聖、萬事を善  
となし、義となし、聖となし、智慧を以て萬物を制定し給ふ。然るに我は進まんよ  
りは、寧ろ常に退かんことを務め、曾て同地位に安んじたることなく『七たびも變  
轉せり』。然も汝の喜び給ふとき、又汝の周到なる聖手を以て我に祐けを與へ給ふと  
き、我は忽ちに幸福となりぬ。蓋し人の援助なくとも、自ら我を救拯し、我に力を  
與へ、我が地位を鞏固ならしめ、我が心汝に轉じて、安息するを得しめ給ふ。  
故に我れ一たび人の慰藉を全く避け、敬虔なる域に進み、我が汝を求むる急なるに

至らば（是れ死ぬべき人は到底我を慰むるに由なければ）我は汝の恩寵を唯望み、  
汝の新鮮なる慰藉に歡喜するを得べきなり。

我に幸福なる萬物を悉く與ふる本源なる汝に感謝あれ。我は汝の前に唯益なく、  
空しく、變轉常なき弱き一人類のみ。然るを我れ何の光榮をか受くるに足らんや。  
將た何の尊敬をか望むの權あらんや。我が虚無なるが故に之を受くべきか。我は唯  
益なきもののみ。浮雲の名譽は實に惡疾、最大の虚榮のみ。是れ眞の榮光より人を  
墮落せしめ、又天界の恩寵より人を隔絶せしむるなり。自ら樂むものは、汝を喜ば  
す能はず、人の賞讃に憐るゝものは、眞の徳性を褫奪せらるゝなり。

眞正の榮光と神聖なる名譽とは汝の與へ給ふ所、己に存するにあらず、汝の聖名を  
喜び、自己の力を恃まず、又汝のために何物をも樂みとせざるものに加へらる。我  
が名にあらずして汝の聖名に榮光あれ。我が事業にあらずして汝の聖業を顯著なら  
しめ給へ。汝の聖名に祝謝あれ。而して人の賞讃の一句も我に加へらるゝ勿れ。汝

は我が榮光なり。汝は我が心の歡喜なり。汝に頼りて我は榮光を被り、又口ねもす樂むべし。而して己がために、我は敢て名譽を求めず、寧ろ我が薄弱なるを誇とせん。

猶太人をして、譯者註、自ら己が義に誇るもの、唯高名を追求せしめよ。而して我をして神より來る榮光のみ求めしめよ。蓋し人の榮譽、地上の高名、世界の顯位、之を天界永遠の榮光に比すれば、唯悉く空虚のみ。幻影のみ。嗚呼我が神、我が眞理、我が慈惠者、嗚呼祝すべき三位一體の神よ。唯汝のみ獨り永遠に讚美と頌榮と榮光とあり。

#### 第四十一章

此の世の名譽は皆悉く輕んずべきに就きて

我が子よ、他は賞揚せられ推薦せらるゝに、汝は貶けられ非難せらるゝとも、自ら

煩ふ勿れ。汝の心を天界遙か我に馳せよ。地上に於ける人々の輕侮も汝を哀ましむるに由なかるべし。

主よ。我等は瞽者なり。忽ちに虚榮に欺かれて道を誤るなり。汝若し謬なく、己を見ることを得ば、何人も我に害を爲したりと言ふを得ず。故に汝に對して泣くべき道あらざるなり。

然も我れ屢悲むべき罪惡を汝に對して行ふがために、萬人悉く我に對して抗するは當然なり。故に我が被るべきものは、唯耻辱と輕侮とのみなるは當然にして、讚美と名譽と榮光とは唯汝にあるべきなり。而して我れ萬人に卑められ、棄てられ、又何の賞揚せらるゝ所もなきを自ら期するにあらずんば、我は心の平和、鞏固を有する能はず、靈的啓導を被る能はず、又全く汝と契合する能はざるなり。

#### 第四十二章

## 我等の平安は人の間に求むべからず

我が子よ。汝若し人を持みて其の意を得、又汝が親密なる知己を有するの故に汝に平和ありと爲さば汝は常に浮薄定まるなく、又之が奴隷とならざるべからず。然れども若し永遠に活ける真理の神に恃まば、朋友の離別も死亡も汝が哀みと爲すに足らざるべし。汝の友との情誼も我に其の源を發し、汝が如何に之を重んじ、又此の世に於て如何に親しき仲なりとも我がためにこそ之を愛せざるべからず。我を度外せる友情は力なく持續せず。我がうちに結ばれざる愛情は眞實淳潔なる能はざるなり。斯かる情誼は悉く破壊せざるべからず(汝の有する所皆悉く)。而して人との友情を全く斷たざるべからず。人は神に近づくこと愈密なるに及びて、愈地上の慰藉に遠ざかり行くなり。而して自ら降る愈卑く、己が眼に見ること愈賤しくして神に昇り行くこと愈高きなり。然れども苟も自ら善あるを認むるものは、神の恩寵の進路を閉塞するなり。蓋し聖靈の恩寵は謙遜なる心のみ與へらるればなり。汝若し己を全く

空しくし、人の愛情に枯涸するに至らば、我が彌増す恩寵を汝に注ぐを禁ずる能はざるなり。汝にして人に干與せんか、創造主の眼は汝より離るゝなり。萬事に就きて己に克つを務めよ。而して神を愛せよ。汝始めて天來の智識を受くるに適したるものとならん。如何なる些事にもあれ、道ならざる愛戀と執着とを之に歸せば、汝は至高の善より墮落して、其の靈魂に汚れなき能はざるなり。

## 第四十三章

## 無益なる浮世の智識に抗して

我が子よ。人の言語に動かさるゝ勿れ。如何に美はしくとも賢かしくとも動く勿れ。『其は神の國は言語にあるにあらず、能力ちからにあればなり』。我が言語を委細に考察せよ。是れ汝の情緒に焰を點じ、汝の頭腦を啓發し、悔恨の道を與へ、之と共に夥多の歡樂を齎せばなり。碩學博識を銜はんがために、神の言語を研究する勿れ。汝

の罪惡を驅逐せんがために之を講究せよ。蓋し幾多の疑題を解くの智識に勝る利益汝にあらん。

設令汝多くを讀み、且つ知悉すとも、之を其の源始根本たる一に歸せざるべからず。我は智識を與へて人を教ふるものなり。人の智識に勝る聰明を、我れ一小兒にも與ふるの力あり。故に我れ一たび教へば、立所に賢明となり、聖靈に依りて多くの利益を得るなり。我に仕ふるを心せず、徒に此の世の秘義に思を潜むるものは禍なるかな！主の主、天使の王、基督現れて、其の學識即ち各人の良心を驗するときは必ず來るべし。而して基督は燈を掲げてエルサレム（譯者註、神の都）を照し、暗に隠れたるものを露き、論辯の舌を封ずべし。

我は人の能く學舎に十年を費して得るに勝りて、永遠の眞理を悟了し得べき智識を、瞬刻にして、謙讓なる頭腦に授くる神なり。我は言語に依らず、意見の錯雜なく、名譽の野心なく、議論の争ひなくして教ふるなり。我は地上の物質を輕んじ、此の

世のものを棄て、天界のものを求め、永遠のものに懼れ、名譽に囚はれず、障礙を排し、總ての希望を我に置き、我の外何物をも願はず、萬物に超えて我を熱愛するの道の人々に教ふるなり。

熱情唯我を愛する人は、神の事柄に通曉して、其の言ふ所欽仰すべきものあり。斯かる人は阻勉なる研究よりは、寧ろ萬物を棄つるに因りて此處に達せしなり。然れども我れ或人には平凡なるものを示し、或人には異常のものを示し、又或人には美しき標章と貌とにて現れ、或人には著しき光明を與へて秘義を授くるなり。聖書の説く所は萬人に向ひて皆等し。然も之を導くこと等しからず。我は内なる眞理の教師なり、心を探究するものなり、思想を鑑識するものなり、我が審判の行はべきを示して行爲を導くものなり。

#### 第四十四章

## 世の物質に執着すべからざるに就きて

我が子よ。萬事に無智なるは汝の義務なり。又汝自ら地上に全く死し、此の世は全く十字架に釘けられたるものと思ひ做すは汝の義務なり。汝又耳を閉ぢて多くの物質の間を通過せざるべからず。而して唯汝の平和を得るに必要なるもののみを思ふべし。紛糾する議論の奴隷たらんよりは、寧ろ不快の事件より眼を轉じ、人をして其の望むがまゝの意見を抱くに任ずること更に必要なり。萬事を神と汝との間に置き其の言ふ所を明に判断せば、汝は容易に服せらるゝことなかるべし。

嗚呼主よ、我等が今過ぎんとするは如何なる道ぞや。見そなはし給へ、我等此の世に於ける損毛を哀む。而して我は憐むべき所得のために勞苦奔走す。我等の靈魂の天界に對する損失は忘却して又記憶にだも上り來らず。我等は寸毫も己に益なきものに心を注ぐ、而して特殊の緊要なるものを遺棄して顧みず。其の全身悉く物質に埋没し、衷心より悔改するにあらずんば、物質に感濁して自ら甘んぜんとする

なり。

## 第四十五章

何人をも信用すべからざる事又人には

語を以て他を害ふ傾向あること

艱難のうちにある我に祐けを與へ給へ、嗚呼主よ。人の助けは我に益なければなり。我れ自ら確かなりと信ぜるものに忠信の缺如せるを見て幾たび悔いたりけん。而して又我が敢て始めに豫期せし事に欺かれけん。故に人を信ずるは益なきことなり。唯義しき救ひは汝にのみ存するを。嗚呼神よ。我に轉じ來る萬事に就きて汝を祝せん。嗚呼主なる我が神よ。我等は弱く且つ定まりなきものなり。而して忽ちに欺かれて變心す。

夫れ何れの處にか會て詐と困苦とに陥らざるまで、萬事に遠慮謹慎なる人あるべ



き。然れども汝を信頼し、單純なる心を以て汝を求むるものは容易に倒れざるなり。而して斯かる人は縦し艱難に陥ることあるも敢て狼狽せず、忽ち救ひを汝に求め、汝に依りて慰藉を得るなり。蓋し終りに至るまで汝を信ずるものと、汝は棄て給はざるを以てなり。朋友の困苦に當りて尙ほ友情易りなき人を發見せんこと頗る難し。嗚呼主よ、汝のみは、何れのとみにありても忠信なり。汝の如きもの他にあることなし。

斯く言へる聖徒は如何に賢なりしよ。曰く「我が心基督に至り、確く定まりて動くことなし」と。我も斯くならんには人の脅迫も容易に我を苦むるに由なく、語の攻撃も我を動かす能はざるべし。誰か萬事を豫知するを得んや。誰か將來の災害を豫め防ぐを得んや。よしんば我等を害する事物を豫知するを得べくとも、如何にして我等を傷ふを避け得べきや。然も我は何故に之に恰好なる準備を爲さざりしか。實に我は憐むべきものなり。又何故に我は爾く容易に人を信頼せしか、假に我等は人

より天使と思惟せられ、又貴ばるゝことありとも、我等は唯懦弱何の採る所なき人のみ。我れ何人をか信頼せん。嗚呼主よ、汝の外何人をか信頼せん。汝は欺かず又欺かれずと眞理に在せり。然るに人は「皆悉く詐者なり」。懦弱、浮薄、殊に其の言語を用ゐるに墮落したるものなり。故に我等は最初に外觀恰かも眞實なるが如く思惟せらるゝものを直ちに信ずべからざるなり。

嗚呼如何なる智慧を以て汝は人の障礙より我を護り給ふや。蓋し人の仇敵は其の家のものなればなり。此處に見よ、彼處に見よ、と言ふとも信ずるを得ず。我を傷ふものは我が嚮導者なればなり。嗚呼願くば我が智識の加はらんよりは、慎みこそ加へ給へ。或人は曰ふ「慎め、慎め、我が汝に告ぐる秘密を守れ」と。而して我れ緘黙して此の秘密を守る間に、彼は我に守れと誡めたる所を自ら守る能はず、忽ち我と彼自らとを過ぎて過ぎ行くなり。嗚呼主よ、斯くの如き事件と謹慎とを缺ける人々より我を守りて、我が彼等の手に陥らず、又自ら斯くの如き衆に陥ることな

からしめ給へ。我が語に至誠堅實なるを得しめ、狡譎なる舌より我を遠ざけ給へ。人々の間に在りて我れ自ら苦むを好まざる所は、自ら又之を施すことを嚴密に慎ましめ給へ。

他の人々に關して沈黙し、又聞ける所を深く信ぜず、之を他に傳ふるを慎むは如何に道に適ひ又平和を有するに必要なるかな。容易に己が胸襟を開かず、唯心の探究者たる汝のみに注意するは如何に幸福なるかな。言語の風に翻弄せられず、心の内外共に唯汝の聖旨みことばを満足せしめんことのみ冀ふは如何に幸福なるかな。天よりの恩寵を受くるに努め、外觀を求めず、表面賞讃せらるゝ所に汲々たらず、唯生活の廓清せられ、篤信敬虔に至るの道のみ勉めて求むるは如何に安全なるかな。其の德行世に顯れ、餘に賞揚さるゝがために、却つて之を傷ひたるものそも幾何。此の誘惑戰闘間斷なく、過誤多き生涯に於て、更に顯れざるは、如何に益多し恩寵なるかな。

#### 第四十六章

身に惡聲起らば信任を神に置くべきに就きて

我が子よ。堅く立て、而して汝の信任を我に置き。言語は畢竟言語のみ。是等は空を飛ぶ、然も岩を傷くる能はざるなり。汝若し惡からば喜んで自ら改悛せよ。汝の良心若し苛責せずんば、神のため惡名に安んぜよ。些細の言語を忍ぶは畢竟大事にあらず。汝は尙ほ更に困難なる磐根錯節を忍んで過ぐるの勇氣なかるべからず。斯かる些事に汝の心を煩はさるゝ所以のものは、汝まだ以て肉に死せず、死自らの實質を思ふよりは、人の名聞を重んずるが故のみ。汝は輕侮せらるゝを怖るゝが故に、汝の缺點を攻撃せらるゝを好まず、寛恕なる隱家を求めんとするなり。

汝先づ明かに自己を反省せよ。必ず汝の心にまた世俗の浸染し、人を喜ばさんとする虚榮の宿るを認むべし。汝が其の缺點のために侮辱せられ、攻撃せらるゝとき、

汝眞に謙遜なりや、世俗に全く死せりや、汝に對して世は全く十字架に釘けられしやと明かにするを得ん。汝の耳を努めて我が語に轉ぜよ。汝始めて人の千萬語に關せざるに至らん。見よ、萬人悉く汝に對し、害意を構へて饒舌すとも、汝之を忍びて、塵ほども之を心に留むる要なきなり。之に因りて汝の頭の毛の一本だに剝落することありや。

己を省みず、眼前神を有せざるものは、惡名を聞きて忽ちに動かさる。我を堅く信じ、己が判断に重きを置かざるものは、人を怖るゝ必要なに至るなり。蓋し我は審判者なり、秘密の探究者なり、我は事情の如何を知り、又人の被らしめらるゝ譏謗と彼が之を忍べるを悉く知れり。是れ皆我より出づ。人各の心に思想を啓示する我が許を得て起れるものなり。我は罪惡と無垢とを審判す。併し秘密の審判を以て豫め其の黑白を人に示す。

人の識明は往々偽りあり、然も我が審判には誤なく、動かすべからず、又枉ぐべ

からず。是れ容易に發見せられず、其の關係明かならず。然も二三之を明かに知り得るものなしとせじ。是れ誤にあらず、誤るべからざるものなりと雖も、愚者の眼には正しと見えざる所なり。故に人は總ての審判を我に委ね、己が意見に準據すべからざるなり。蓋し義者は神より如何なる事の轉じ來るとも、決して動くことなく彼に對して不正のこの齎さるゝも、敢て之に煩さるゝことなし。のみならず人々の道理ある辯證の外は、益なき賞讃に歡喜することなし。蓋し斯くの如き人は、我が人心の探知者にして統御者なるを知り、又外觀に従ひ、或は容貌を以て人を審判せざるを知ればなり。而して人の眼には美はしく見ゆるところも、我が眼には非難すべきものあるを往々發見するを知ればなり。

嗚呼主なる神よ。義の審判者、全能にして寛恕に富み給ふ神よ。汝は人の弱くして罪あるを知り給ふ。汝我が力となり、我が總て信頼の標的とならしめ給へ。我が良心は頼むに足らざればなり。我は自ら棄つべきものあるを知らずと雖も、尙ほ

自ら義しとなす能はず、汝の恩恵なくば、何人も汝の前に義しきものとなり得ざるなり。

#### 第四十七章

永遠の生命を求めんがため此の世の總ての  
苦痛に堪へざるべからず

我が子よ。我がために汝の企てたる事業に苦痛多きに狼狽し、或は汝に落ち来る艱難のために全く壓迫せらるゝ勿れ。唯我が契約を信じ、有ゆる出来事に當りて力を得、又慰めを得よ。我は滿ち溢るゝ褒賞を汝に與ふるの力あり。汝が此の世に於て勞作するも長からず、悲痛を以て遮らるゝも永劫にあらざるなり。暫時忍んで待て、勞苦艱難全く終るの日あるべし。光陰と共に消え行くものは皆價なく空しさものなり。

汝の爲すべきは、力を盡して爲せ。我が葡萄畑に於て、忠實に勞作せよ。我必ず褒賞を與ふべし。書け、讀め、悲め、黙せよ、祈れ、大膽に十字架に苦め、永遠の生命は是等に價せり。否更に大なる苦闘の價値あり。主に見ゆるの日、平安は齎せられ、此の世に在るが如き晝夜は失はれて、永遠の光明、不變の輝赫、搖がざる平和、確固たる安息は與へらるべし。此處に於て、汝は『此の死の體より我を救はんものは誰ぞや』と歎くことなく、又『禍なるかな、我はメセクに宿せり』と叫ぶことなかるべし。死は倒に投げ出だされ、救ひは衰ふることなく、不安の念存することなかるべし。而して唯溢るゝ歡喜と、美はしくも愛に充てる同伴とは彼處にあるべし。

汝若し天界に今在る聖徒の永遠の冕冠と、曾て世にあるの日侮辱せられ、世の生活に於て何等の價値をも有せざりし彼等の今榮光を得て歡喜せる態とを瞥見するを得ば、汝は現に塵に等しく遜り、人を指揮せんよりは、寧ろ萬人の足下に跪伏する

をすら願ふに至るべし。

嗚呼汝若し之を洞察し、汝の心の奥深く之を藏めなば、如何に汝は其の苦痛を忍ぶを得べきや。此の永遠の生命のために有ゆる苦痛多き事業に耐ふべきにあらずや。神の國を得ると失ふとは、決して些細の事件にあらずるなり。天に汝の眼を轉せよ。見よ。我は、曾て此の世に於て大なる苦痛を受け、今は現に歡喜しつゝ、慰藉せられ、搖がず、息へる我が聖徒と偕に在り。彼等は我が父の國の有らんかぎりは決して永久に我と偕に在るべし。

#### 第四十八章

永遠の日に就きて又此の世の窮乏に就きて

嗚呼、天界の居住は譬ふるものなき幸福なるかな。暗に蔽はれず、最高の真理の窮りなく耀く永遠の日は此の上なくも幸福なるかな。嗚呼永久に喜ぶべく、永久に動

かず、又永久に變轉せざる日よ。嗚呼此の日は必ず來るべし。此の世の物質は悉く盡き去るべし。聖徒には永遠の光明に輝く日となり、地上に彷徨せしものには玻璃を隔つる如く脆なるべし。

天の市民は其の日歡樂窮る所を知らず、イブが追放の子は辛酸と煩累とを被るなり。此の世に於ける日は唯悲愁と窮乏とに満たされ、束の間にして又不幸なり。此の世に在る人は多くの罪惡に辱められ、種々の慾情に虜にせられ、種々の恐怖に追求せられ、種々の虚榮に眩惑せしめられ、種々の誤謬に導かれ、種々の勞役を課せられ、誘惑に苦められ、快樂に活力を殺がれ、缺乏に困窮せしめらるゝなり。

嗚呼何れるときか此の不幸の終る日あらんや。何れるときか我々が罪惡の纏綿するを拂ひ得べきや。何れるときか我れ専心唯汝のみを思ふを得べきや。何れるときか我れ汝に依りて歡喜に溢るゝを得べきや。何れるときか障礙なく心神共に煩累なき眞の自由を體得すべきや。何れるときか確固たる平安、搖がず亂れざる平安、内外

より来る平安、何れの道にも缺けなき平安を得べきや。嗚呼恵み深き耶蘇よ。何れ  
 のときか汝を仰ぎて立つを得んや。何れるときか我れ汝の聖國の榮光に與るを得ん  
 や。何れるときか汝全く我と偕なり給ふべきや。嗚呼何れるときか我れ汝が永遠の昔  
 より汝の愛し給ふの者のため備へ給ふ聖國に於て、汝に偕なり給ふべきや。我は是  
 れ日毎に戦闘と大なる災害との存する仇敵の地に住みて憐にも追放せられたるも  
 のなり。

追放せられたる我を慰め、悲みを鎮め給へ。我は唯汝のみを望みとす。世より受  
 くるの歡樂は、悉く是れ我が煩累となる。我れ常に我が心の底にて汝と樂まんと欲  
 すれども、我れ尙ほ其の域に進むを得ず。我が熱望するところは天界のものに向ひ  
 て全く己を投ずるにあり。然も地上の物質と我が未だ死せざる慾情とは我を執着せ  
 しむること甚だし。我れ心に於ては萬物に超然たらんことを望む。然も肉に於ては我  
 が物質に壓迫せらるゝ極めて急なり。斯くて我は不幸の人たるなり。我れ己と戦ふ。

而して我れ己と戦ふ。而して我が靈性は天を求めつゝ尙ほ我が肉體地に引かれ、自ら  
 悲痛に堪へざるなり。我が心は天界に憧れつゝも我が祈禱のうち肉體的妄想頻に起り  
 て、嗚呼我が内部の苦痛は如何ばかりぞや。嗚呼我が神、我を疎んじ給ふ勿れ。汝の僕  
 に對して憤りつゝ轉じ去り給ふ勿れ。汝の光明を送りて彼等を散亂せしめ、汝の征矢  
 を放ちて仇敵の妄想を粉碎せしめ給へ。我が感覺を集中して汝に向ふを得しめ、世  
 の萬物を忘れ、罪より起る妄想を速に驅逐し、之を輕んずるの力を與へ給へ。我を  
 救ひて虚榮に動かさること無からしめ給へ、嗚呼永遠の眞理なる神よ。我に臨み  
 て、總ての汚穢を神の面より遠ざけ給へ、汝天の美はしき神よ。我を容させ給へ、  
 憐憫を以て寛かに我をあしらひ給へ、我は祈禱の間に於てすら、尙ほ往々汝の外に  
 思を轉ずるなり。我は種々の煩悶に虜へらるゝを心より懺悔するものなり。我れ坐  
 するも志此處に存せず、立つも心は此處に在らず、其の思の導くがまゝに、諸方に  
 彷徨するなり。思想の赴く所我れ又彼處に在り、思想の行く所、我が情緒も多く彼處

に在り。而して性向の喜ぶ所、習慣の望む所忽ちに我が前に備へらるゝなり。  
 汝は斯かる場合の眞にあるべきを明に説き給へり。曰く汝の財ある所に汝の心も  
 あるべければなりと。我れ天界を追ひ漂はゞ天界のものを喜び求むべきなり。我れ  
 將た此の世を愛せば、此の世の幸福を喜び、其の窮乏を悲むべきなり。我れ若し肉  
 を愛せば唯肉情の好む所を妄想すべきなり。我れ若し聖靈を愛せば靈界の問題のみ  
 を思ふを好むべきなり。我が愛する所、我れ好んで語り、又聽き、其處に我が心を  
 注ぐべし。汝のため其の性向を曳く力強き總ての物質を棄て、聖靈の恩寵に依りて  
 肉の穢れを十字架に釘け、透明なる良心を以て淳潔なる祈禱を汝に獻げ、身の内外  
 共に地上の事情より悉く離れ、天使の群に投ずるを許さるゝものは實に幸福なるか  
 な。嗚呼主よ。

#### 第四十九章

永遠の生命の希望に就きて、剛毅なるものには  
 如何なる褒賞の契約を與へらるゝかに就きて

我が子よ。天より與へらるべき永遠の恩寵を得んことを望み、此の肉體の希望よ  
 り免れんことを希ひ、絶えず我が光明に浴せんと欲せば、汝の心を廣く聞き、汝の  
 全靈を獻げて此の神聖なる啓示を受けざるべからず。恵を以て汝に望み、煩を以て  
 汝を熱せしめ、強く汝を支へ、此れ無くんば汝將に物質に吸引せらるべき汝の體を  
 支ふる力を與へつゝ、此の禮遇を以て汝を待つ天の厚意に對し、汝が滿腔の感謝  
 を獻げよ。是れ汝の努力と冥想とに依りて得べきにあらず。唯天界の厚意、神の慈  
 愛の賜なり。斯くて汝は總ての徳に於て更に愈進歩し、更に著しく謙遜となり、將  
 來の苦闘の用意を整へ、汝の安全の情緒を注ぎて、我を愛するに努め、熱烈なる衷

情を獻げて我に事ふるに至るべし。

我が子よ。火は往々燃ゆるも其の煙立ち昇らざることあり。斯くの如く、或る人々の熱望は天に向つて動くも、尙ほ肉慾の誘惑より脱却する能はざるなり。而して彼等神に對して斯く熱切なる要求を有するは、神の榮光を唯單純に欲するものと爲す能はざるなり。汝の欲望のため自ら恰かも敬虔篤信なるが如くに信するものあり。然れども自愛を含むの欲望は、淳潔と言ふべからず、又正しとなすべからず。汝に樂しく益あるものを求むる勿れ。唯我れ以て嘉するに足るとなし、又我が榮光に益あるものを求めよ。蓋し汝自ら事理を判するの明あらば、汝の欲望或は欲望すべきものよりは寧ろ我が命ずる所を整へ、之に従ふの要あるを知るべし。我は汝の欲望を知り、又汝の呻吟する聲を聞けり。汝今神の子等の榮光ある自由を樂まんとことを熱望し、永遠の住宅を望みて喜び、天に在る汝の家郷を慕ひ居れるなり。然も其の時未だ至らず、尙ほ多くの時を剩せり、是れ戰の時期、勞苦鍊磨の時期なり。

り。汝最高の善事を求む。然も未だ尙ほ汝に至らざるなり。

我は即ち其の人なり。(と主は宣ふ)。神の國の來るまでは、汝我を待たざるべからず。

汝は尙ほ地上に於て訓育を受け、多くの事柄に鍊磨せざるべからず。慰藉の與へらるゝこと間斷ありと雖も、成業は必ず期すべきなり。故に勇を鼓せよ。性向に反する事に苦むも尙ほ全力を盡くして剛毅なれ。新しき人を纏ひつゝ異なる人となるは汝の義務なり。時に汝が望まざる所を取て爲すは汝の義務なり。汝の爲すべき所を放擲する勿れ。他の喜ぶ所は遺憾なく遂げられ、汝自ら樂まんとするものは遂げられず、他の言ふ所は用ゐられ、汝の言ふ所は無きが如くに貶けられ、他の求むるものは與へられ、汝の求むる所は得られざるべし。

爾他は人の賞揚極めて著しく、汝に對しては一語を寄するものも無かるべし。他には彼此皆委ねらるゝも、汝は要なきが如くに取扱はるべし。是れ汝の性向には多大



の苦痛なるべしと雖も、汝黙して之を忍ぶは實に偉大なる事業なり。斯くの如き事若くは之と同様なる事に於て主の忠信なる僕は、如何なる程度まで萬事に自己の意志を放棄破却し得るかを試みらるゝなり。汝の意志に反する事柄を視察し、又忍ぶとき汝の己は全く死するを要せざるもの甚だ稀なり。命令に依りて汝が不便にして必要なしと見ゆる所を爲す場合には殊に然りとす。蓋し長上の下に在る汝は、其の權威に服せざるを得ず。故に他の指揮を受け、汝自らの意志を棄てざるべからざるを感じて苦惱を醸すなり。

然れども我が子よ。其の勞苦の結果と將に近づける褒賞の大なるを考察せよ。汝此等を忍ぶに苦なく、寧ろ汝の忍耐を以て大いなる慰藉と爲すに至るべし。今汝が容易に放棄する些細の意志の代りとして、汝の意志は常に天に於て遂げらるゝを得べし。然り彼處に於て汝は望む所を悉く發見すべく、汝が當に願ふべきの道を得べし。彼處に於て汝は朽つるの慮りなき有ゆる賜を容易に獲得すべし。彼處に於て

汝の志は永久に我と一致し、又物質的利己心より貪ぼることなかるべし。彼處に於ては汝に抗するものなく、汝を非難するものなく、汝を妨ぐるものなく、汝の前程を遮るものなく、汝の熱望するもの、悉く汝の眼前に供せられ、汝の全心精氣を新にして歡喜の之に溢るゝを覺ゆべし。彼處に於て我れ汝が此の世の苦痛の全きに對して榮光を、煩累に對して賞讃の上衣を、微位に對して王座を、永久に汝に與ふべし。彼處に於て服従の結果は現れ、悔恨の勞苦は歡喜となり、卑しき奉事は榮光耀く冕冠と代るべし。

然れば此の世に於ては萬人に屈して謙遜なれ、何人が何を語り又命ずるとも深く意とする勿れ。唯其の長上なると下僚なると、同輩なるとに拘はらず、汝に求むる所に意を留めよ。而して彼等の希望を充實し、能く之を處理し、至誠之を完成するに努めよ。一は此を求め、他は彼を望み、一は此の事に賞揚せられ、他は彼の事に名聲を得、幾千回嘆美せらるゝとも、汝は斯くの如きものに情緒を亂す勿れ。己を

轉じ、唯我が歡喜と榮光とのみを求めよ。汝の望みは唯汝此の一事ならざるべからず。曰く生けるにも死するにも汝に依りて神の榮光の顯れんこと即ち是なり。

### 第五十章

神の聖手にありて如何なる寂寞に身を

投ぜざるべからざるか

嗚呼主なる神、齋潔ひよき父よ。現在に於て將た永劫の未來に於て汝に祝福あれ。是れ汝の望み給ふ所遂げられざるなく、汝の爲し給ふ所至善ならざるはなければなり。汝の僕をして、己に依らず、又萬象に依らず、唯汝に依りてのみ歡びあらしめ給へ。汝のみ眞の喜樂あり。汝は我が希望、我が冕冠なり。汝は我が歡喜、我が榮光なり。嗚呼主よ。汝の僕は何をか有する。何の功績なきにも拘はらず、汝に與へらるゝものそも如何ばかりぞや。汝の與へ給ふ所、又汝の造り給ふ所、悉く皆其れ汝の

ものなり。我は幼きよりして、貧しく煩ひ多きものなり。而して時に我が靈魂は涙に咽ぶまで悲痛を感じ、時に又我が前に横はる辛苦のために憂悶極まりなきものなり。

我は平和より生ずる歡樂を熱望し、汝の慰藉の光に依りて養はる、汝の子弟の平和に眷戀として之求む。汝若し平和を與へ、又我が心に潔き歡喜を注ぎ給はば、汝の僕の靈魂は和樂に満ちて汝の讚美に熱するを得ん。然も汝退き給はば（往々汝の爲し給ふが如く）彼は汝の誠を守るの力なく、跪きて彼が胸を打たん。是れ今や彼は其の昔の如くならざるが故なり。汝の燈ともしび彼の頭上に輝かば、而して彼汝の翼の下にあらば、彼は襲ひ來る誘惑より難らるゝを得ん。

嗚呼義なる父よ。永遠に讚美すべき父よ。汝の僕の試みらるべき時は來りぬ。嗚呼愛する父よ。此の時に當り汝の僕は汝のため何事か苦まざる可らざるの時なり。嗚呼父よ。いや増りて榮光を頌ふべき時となりぬ。是れ永遠の昔より其の來るべき

を汝豫め知り給へり。而して汝の僕は、暫しの間肉體の苦を受け、心靈汝と偕に永遠に住むべきなり。汝の僕は暫らく輕侮せられ、卑められ、人の眼には懦弱に、苦痛困憊に蹂躪せられざるべからず。是れ新なる光明の曙に於て、汝と偕に起き上り、天界の榮光に浴せんがためなり。齋潔きよき父よ、汝之を定め給へり、必ず爲し遂げ給ふべし。而して汝の命じ給へる所は自ら成就し給ふべし。

蓋し斯くの如きは、何處何れの事に依りても、汝が彼を導き給ふ試練に對し、世に在りて汝を愛せんがために困窮艱難を喜ぶ汝の友には、唯慕はしき事たるなり。汝の聖旨に依らず、汝の允許に依らず、又理由なくして、何事か此の世に起らんや。主よ、我汝の義しき審判を知らんがため、又我が心の高慢、倨傲を全く棄てんがため、汝に依りて貶けらるゝは我が喜ぶ所なり。人に受けんよりは汝に受くるの慰藉を追求せんがため、耻辱を我が面に被るは我がために利益あるなり。我は更に公平正義を輕んずるにあらざるも、尙ほ不義を以て正義を苦め給ふ汝の不思議なる

審判を畏むの道を學べり。

汝は我が罪惡を免さず、嚴しき答を以て我を撃ち、悲痛を與へ、不安を送り、我が心身共に苦め給ふを感謝し奉る。普天の下我を慰むるものあらず、唯汝のみ、嗚呼主なる我が神よ、唯汝のみ我が慰めなり。之を傷け又之を癒し、之を地獄に降し又之を伴ひ歸し給ふ我が靈魂の醫師よ。汝の訓練我が道にあり、汝の答我を導く。

見そなはし給へ。嗚呼愛する父よ。我れ汝の掌のうちに在り。我れ汝が懲戒の答の下に我が身を横たふ。我が邪曲の汝の聖旨みことばに依りて矯められんがため、我が脊を撃ち又我が頭を撃ち給へ。汝の歡樂を追ひ求むるに至らんがため、汝の忠信且つ謙遜なる僕と我を爲し給へ。(汝が善を爲さんことを常に求め給ふ儘)汝のため我は己を廓清し、放縱を悉く矯正せんとす。未來に於て刑罰を被らんよりは、今之を受くるに若かざるなり。汝は萬事を悉く知り給ふ。而して人の良心に有する所は汝に隠るゝ能はず。事の成らざる前、既に汝は其の赴く所を知り、汝を教ふるものを要し給

はず、又地上に行はるゝ所を諫むるを要し給はざるなり。汝は我が靈性發展の要路を知り、又我が罪惡の鎊を除かんがため、如何に著しき辛苦を経ざるべからざるかを知り給ふ。汝の外何人にも知悉せられざる我が罪深き生活を指彈し給ふ勿れ。汝の欲し給ふがまゝに我を用ひ給へ。

嗚呼主よ。我をして、知るべきを知らしめ、愛すべきを愛せしめ、汝の喜び給ふ所を讚美せしめ、汝の貴び給ふ所を重んじ、汝の眼に不潔汚穢と見る所を避くるを得しめ給へ。眼に觸るゝ所に從つて判斷せず、又無智なる人々より聞く所に據りて處決することなからしめ、見るべきものと靈的なるものとの區別を明にし、常に汝の聖旨に適ふ所を先づ求めつゝ、眞の判斷を以て事に處するを得しめ給へ。

人の心は往々己が認識に依りて欺かれ、世を愛するものは、唯五愛に從ふ所のみを求めて欺かるゝなり。人に依りて大に重んぜらるゝ人の善事とはそも何ぞ。詐僞者に諂ふ詐僞者、虛榮者を讚美する虛榮者、替者に與する替者、罪人に崇めらるゝ

罪人、而して又自ら欺くものゝみ。虚偽の讚嘆を受けんよりは、眞理に依りて辱めを受くるは更に勝れり。蓋し汝の眼に映ずる所こそ人の眞面目なれ、又他あるを得んや。

## 第五十一章

神の要し給ふ所は如何なる卑しき事業にも謹んで服せざるべからず

我が子よ。汝は絶えざる熱心を以て德行を勵むの力なきものなり。又至高の點に固く汝の眼を注ぐに足らざるものなり。汝に墮落の本質あるに因り、時に卑しき事業に係はり、此の穢れたる世の煩累を負ひ、汝の意志を枉げて苦痛を嘗むるの要あるなり。汝此の朽つべき肉體を有する間は、心に倦怠困憊を感ぜざる可らず。故に汝は時として肉あるがために肉體の煩累を負はざるべからず。而して之がため汝の靈的

研究と神に關する冥想のみに耽る能はざるなり。

故に時として卑しき物質的事業に服し、善行に依りて己を新にし、心の困憊枯涸を忍んで耐へ、我れ再び汝に望み、汝の不安より救ひ出すまで、我れ來るべきを信頼して待つは、汝のために甚だ益あり。是れ我は汝をして其の勞苦を忘れしめ、心の平靜を樂ましむべきを以てなり。我は汝の前に聖書の樂しき地域を開展せしめ、汝の苦悶せる心をして我が誠に歸り來らしむるの道を具ふべし。而して汝は言はん『我れ意ふに今の時の苦は、我等に顯れん榮に比ぶべきにあらず』と。

## 第五十二章

人は慰藉を受くるの價值なく寧ろ譴責を受くべきものなるを自ら思ふべし。

嗚呼主よ。我は汝の慰藉を受くるの價值なく、又靈性に汝の臨み給ふ價值なきも

のなり。然らば汝我を窮乏辛苦のうちに見棄て給ふとも、是れ實に當然の處置なり。我れ設令涙の海を漲らすとも、尙ほ汝の慰藉を受くるの價值なし。我は何の價值もなく、唯汝の笞と刑罰とを受くべきものなり。我は悲しくも屢汝に背き、種々の事に依りて罪を犯せばなり。故に萬事を正當に考察せば、我が些細の慰藉も受くるの價值なきは明なり。然も、嗚呼恩寵に滿ち、情に富み給ふ神よ、汝は恩惠の器に溢る、裕なる賜を以て、汝の事業の盡さざるがため、又其の所業に勝りて汝の僕を慰めんがため、其の功績に超えたる賜を與へ給ふ。蓋し汝の慰藉は人の論賞とは異なるなり。

汝我に與へ給ふ天來の慰藉を受けんがため、我れ何事をか爲せしや、嗚呼主よ。我は何の善事をも爲したるの記憶を有せず、却つて常に罪を犯しつゝ、容易に改め得ざるものなり。是れ事實なり。我は之を否定するを得ず。我れ若し之に異議を爲さば、汝は我を棄て給ふ。而して又我を護るものなかるべし。我が罪の獲る所は何ぞや。地獄と永遠の焰とのみ。我は眞實に懲戒艱難を受くるの外なく、汝の敬虔な

る聖徒の間に記憶せらるべき価値なきものなるを告白す。而して我は之を自ら聞くを欲せずと雖も、尙ほ汝の憐れを受くるの価値を得んがため、せめては我が前に己が罪を鮮かならしめざるべからず。

我れ罪惡を有しつゝ尙ほ且つ多くの慰藉を被るは何事ぞや。我が口は此の一語の外又言ふ所を知らず。曰く『我は罪を犯したり。嗚呼主よ、我は罪人なり。我を憐み、我を赦させ給へ』と我れ暗黒の界、死の蔭に蔽はるゝ地に至る前、其の苦痛を今此處に受くるを許させ給へ。汝は此の穢れたる憐れなる罪人をして、自ら悔恨せしめ、其の背徳に對して自ら遜らしむるに如何なる要求を爲し給ふや。詐なき心の悔恨と謙遜とは、赦免の希望を與へ、煩ふ良心を鎮め、失へる神の慈愛を挽回するなり。之に由りて人は來るべき忿怒より救はれ、神と堅忍なる靈魂との潔き接吻は行はるゝなり。

罪に對する痛切なる悔恨は汝の嘉し給ふ供物なり。嗚呼主よ。汝の臺前には是

ぞ乳香の芳ばしきに勝れるなり。是れ又汝の齋潔きよみ聖足に濺ぐべき美はしき香油なり。蓋し汝は悔恨せる碎けたる心を卑み給はざればなり。仇敵の怒れる面より遁るべき隠家此處に在り、到る處に被れる汚穢、瀆辱矯改洗滌すべき所此處に在り。

### 第五十三章

神の恩寵は地上の物質を求むるものには

與へられず

我が子よ。我が恩寵は價貴く、地上の物質と混同すべからず、又物質的歡樂と混同すべからず。故に汝は若し溢るゝが如くに之を得んと欲せば、恩寵を受くるの障礙なるものを悉く棄てざるべからず。汝が獨り冥想すべき最も愛する住所を汝のため  
に擇べ、而して何人とも語を交ふる勿れ。神に敬虔なる祈禱を獻げ、汝の靈魂に悔恨を喚び、汝の良心を淳潔ならしめよ。汝此の世を虚空として決して重んずる勿れ。

物質に携はるの前先づ神に結べ。蓋し汝は我と偕なると同時に、此の世の消え行く物質を有する能はざるなり。汝の知己朋友より全く離れ、地上の慰藉に己を委ねべからざるなり。彼の祝福せられたる使徒パテロが勸むる如く、基督に忠信ならんものは、此の世に於て旅人又寄寓者として自ら誠めざるべからず。

世に在りて地上の物質に眷戀たらざるもの、死の間際に於ける確信はそも如何に偉大なるべき。然れども設令萬事より其の身を退くも、靈的ならざる頭腦は聰明なる能はず、肉的人物は、靈的なる人物の自由を悟る能はざるなり。故に人若し眞に靈的ならんことを願はば、其の親近せる人々に遠ざかると共に、又親しからざるものを疎んずべきは緊要なれども、其の最も慎むべきは己にあり。汝既に全く己に克たば、他は唯々として汝の支配の下に在らんのみ。全き勝利は己を服するにあり。蓋し己を服したるものは、其の情緒を自由に支配して理性に準ぜしむるを得べく、其の理性は我に忠實なるを得ん。斯くの如き人こそ眞に己の克服者、世界の王と稱すべきなれ。

汝若し此の域に達せんことを熱望せば、自ら勇を鼓し自己に引かれ易き隠れたる道ならざる性向を摘出免除し、利己的世の物質に執着せざるやう、斧を樹の根に置かざるべからず。是れ根柢より克服せられざるべからざるものにして、あらゆる罪惡は殆んど皆是れより来るなり。而して惡性一たび撲滅せられ、克服せられんか、平和と安靜とは立所に至るべきなり。然も全く之を撲滅するまでに力を盡さず、所在其の殘餘を存するがため、煩累常に絶えずして、之に超越しつゝ靈性雄飛する能はざるなり。然れども我に向ひて自在に進まんと欲するものは、徳に背き、道ならざる有ゆる慾情を戒禁し、眷戀の情を籠めて物質に傾くことなきを期せざるべからず。

#### 第五十四章

性向と恩寵の争闘に就きて

我が子よ。性向と恩寵の争闘に就きて誠實に注意せよ。兩者はいたく相反せるものなりと雖も、其の動くや甚だ微妙にして、其の間内省靈的な人物と雖も、往々之を區別し得ざるものあり。萬人悉く善を冀ひ、其の言語行動の善ならんことを望む。故に善行を標榜して多くは欺くなり。性向は老獪にして、多くは之に説服せられ、係蹄に陥り、詐騙せられ、常に其の目的のために頓使せらるゝなり。然れども恩寵は常に單純にして、總ての邪惡より人を護り、欺くことなく、其の最後の安息たる神のために萬事を淳潔に行はしむるなり。

性向は死を忌み、又卑められ、厭伏せられ、從屬せしめられ、克服せらるゝを厭ふなり。之に反して恩寵は己を戒禁し、性慾を撲滅し、服従を求め、卑めらるゝを望み、自由を擅にせんことを願はず、常に神の下にあり、之を離れず、神のため萬人は跪かんことを遜りて求むるなり。性向は己の利益を求むるに汲々として、他己が利のために用ゐんことのみを期す。恩寵は己が利益と便宜とを思ふことなく、

唯惟れ多くの善事を爲さんことをのみ求むるなり。性向は名譽と敬意とを受けんことを願ふ。恩寵は忠誠、唯、神の名譽と榮光とのために萬事を提供す。

性向は羞耻侮辱を怖れ、恩寵は耶穌イエスの名のために侮蔑に甘んぜしむ。性向は安逸と肉體の放縱とを求む。恩寵は身に要務なき能はず、又勞苦を愛慕す。性向は珍奇華麗なるものを求め、簡易粗造なるものを厭ふ。恩寵は平明卑賤に甘んじ、粗末なるものを忌むことなく、舊套弊衣を纏ふを厭ふことなし。性向は滅ぶべき物質に執着し、此の世の所得に歡喜しつゝ、之を失ひては悲愁に陥り、些細の毒語にも憂悶す。恩寵は永遠のものを求めて、朽つべきものに執着せず、之を失ふも煩悶することなく、手痛き攻撃にも揺ぐことなし。是れ朽つることなき天に、其の財寶と歡喜とを託するを以てなり。

性向は貪婪なり。與ふるよりも受くるを望み、己、專有せんことのみを念とす。恩寵は温なる情緒を有し、他に願はんことを期しつゝ、己が益を謀らず、乏じきに



満足し、受くるよりは與ふるを幸福と信ずるなり。性向は人をして物質に傾向せしめ、其の肉情と虚榮とを求めて東西に彷徨せしむ。恩寵は人を神に導き、總ての徳行を慕はしめ、物質を棄て世を遁れ、肉情を厭ひ、戸外に漂浪するを戒め、世間に現るゝを耻づるに至らしむ。性向は物質的快樂を有せんことを望み、之に依りて肉感の歡びを受けんとす。恩寵は神に依れる慰藉のみを求め、見ゆべき物質に超然として至高の善のみを喜と爲す。

性向は己が利益にのみ萬事を歸し、酬いなきものを忍ぶを得ず、其の表したるの好意を、又等しく酬いられんことを望む、否寧ろ之に過ぐるものを求め、然らずんば讚嘆賞美せられんことを望み、其の勤勞と贈品との價值を認められんことを熱心に求むるなり。恩寵は朽つべき物質を求めず、神のほか又報酬を望まず、永遠のものを得るに必要な物質の外は望むことなし。

性向は多くの朋友と好意ある人々を有せんことを望み、高官と貴顯とを讚嘆し、

權威に面を柔げ、富豪に諂り、己と等しき人々を稱揚す。恩寵は其の敵をすら愛し、友の多さを誇るに足らずとなし、其の徳行道に適ふにあらずんば、貴顯と雖も重んずることなし。恩寵は富豪よりは寧ろ貧者を愛し、權威に越えて無垢なるものに同情し、偽善なるものよりも誠意を有するものを喜ぶなり。恩寵は至高の賜を得しめんとして、善人を絶えず鼓舞獎勵し、神の子と等しき域に進まんことを勸む。性向は窮乏困苦に忽ち眩く。恩寵は堅忍不易其の必要なるものを忍びて耐ふ。

性向は萬事を己に歸し、己がために勵み、己がために論争するなり。恩寵は萬事を其の本源たる神に返却し、善事を一つとして己に歸せず、倨傲なる觀念なく、己の意見に満足することなく、又之を他の前に提供するを好まざるなり。而して其の感覺智慧を用ゐるに當りて、永遠の智慧と神の審判とに之を委ぬるなり。性向は秘密を知り、珍聞を求むるに汲々たり。而して世間に出て、其の感覺を以て諸事を試み、其の讚賞し欽仰する所を認めて之を行はんと欲するなり。恩寵は敢て珍聞を開

かんことを求めず、不思議を解かんと欲せざるなり（蓋し是等は悉く人の久しき墮落に因して起るを知らばなり）而して地上珍しきものなく、怪むべきものなしと信するなり。恩寵は感覺を制禁し、徒らなる喜樂と奢侈とを避け、讚嘆稱揚せらるべきものを秘し、萬事に就きて益ある結果を收めんことを期し、神に讚美と榮光とのあらんことをのみ是れ求むるなり。己がためには更に劃策する所なく、又公衆の前に稱揚せらるゝことを望まず、神の賜に依りて祝福を受けんことを冀ふ。蓋し神は淳潔なる愛を以て萬事を與へ給ふを知らばなり。

此の恩寵は靈的光明なり。神の特殊の賜なり。而して擇ばれしものたるの表章、永遠なる救ひの保證書なり。之に依りて人は地上の物質を棄てつゝ、天界のものを求め、肉情より轉じて靈的人物と昇り得るなり。故に性向の抑制禁壓せらるゝこと愈堅實にして恩寵の侵入し來ること愈盛なり。而して内省的人物は神の訪ひ給ふに依りて神の像かたちに従ひ、日々新なる人となり得るなり。

## 第五十五章

### 性向の腐敗と神の恩寵の能力とに就きて

嗚呼主なる我が神よ。汝は其の像かたちに肖せて我を造り、救ひに入るに偉大にして且つ必要なる此の恩寵を我に示して之を與へ給へり。之に由りて我は我が類ひなき邪念を克服して、我が罪惡と墮落とに陥るを免れ得るなり。我は我が肉のうちに罪の則すべと心の則すべと争ふを感ずるなり。而して汝の至聖の恩寵我が心に注がれて、我を護るにあらずんば、我は、事毎に慾情に囚はれ、我が感覺を抑制する能はざるなり。

其の幼きより、絶えず罪惡に浸染せる性向の克服せんがため、汝の恩寵を裕に被らんこと、我に最も緊急なり。嗚呼主よ。蓋し第一の人アダムより性向は墮落し、罪惡に由りて腐敗し、汚穢の限りを盡して全人類を辱めたり。即ち性向は、もと汝

に依りて至善且つ端正に造られたりと雖も、今や腐敗して罪惡に充ち、懦弱となりぬ。蓋し其の傾向、邪惡と卑陋のものに赴くがまゝに委ねられたればなり。尙ほ残れる乏しき力は、恰かも灰に蔽はれたる火片の如し。之が著しき晦迷に陥りたるは正に當然なり。然も尙ほ眞理と虚偽、善と惡とを分つの明を有しつゝ、其の認識する所を充實する能はず、眞理の光明に歡喜するを得ず、其の情熱に吸引せらるゝなり。

故に、嗚呼我が神よ、我は汝の誠の至善、至義、齋潔なるを知り、又禁戒すべき總ての罪惡を認めつゝ、内なる人に従ひて汝の律法を慕ふなり。然れども内に依りて我は我が理性よりは寧ろ我が情慾に従ひつゝ、罪の則に事ふるなり。故に我が前に置かれたる善を行はんと欲すれども、如何にして之を完うすべきやを發見する能はざるなり。故に我れ屢善事を爲さんと企つるも、我が懦弱を祐くる恩寵の缺如せらるるため、光明は失はれて再び舊の懦弱に返るなり。故に我れ圓滿に達するの道を知

悉し、我が爲すべき所を明に認むるも、我自らの腐敗の重さに引き降されつゝ、更に圓滿に向つて進むを得ざるに至るなり。嗚呼主よ。善業を企て、之を遂行し、之を完成せんがため、我は唯神の限りなき恩寵を受けんことを要す。是れ汝の恩寵なくんば我れ何事をも爲すを得ず、汝のうちにある、汝の恩寵に能力を得ば、何事とも雖も我が能はざる所なし。嗚呼天來の恩寵なるかな。之なくんば我が最も重んずべき行爲も、將た何の價かある。我が生來の才幹も何の貴き所かある。伎倆も富貴も、美貌も能力も、才智も雄辯も、汝の恩寵に依らずんば汝の前に何の價值をも有せざるなり。嗚呼主よ。性向に加へらるゝ賜は、善惡に對して何の差違もなし、然れども擇ばれたるものに對する賜は恩寵と慈愛なり。而して此の名譽の表章を有するものは、永遠の生命を受くるの價值あるものと認めらる。故に夫の恩寵は豫言を爲し、或は奇蹟を行ひ、或は言論に巧に、或は貴ばるべき何事を有するよりも、更に貴ぶべきものなり。設令、信仰、希望、或は將た他の諸徳を具ふとも、慈愛と恩

寵なくば汝に享け容れらるゝに足らざるものなり。

嗚呼至幸至福の恩寵よ。靈性の貧しさものを徳に富ましめ、心の謙遜なるものに裕なる賜を酬ゆる恩寵よ。汝我に降れ。而して速に汝の慰藉を以て我を満たしめよ。然らずんば我が靈魂は心の困憊枯槁に依りて衰弱せん。我れ汝を求む。嗚呼主よ。我れ汝の前にありて恩寵を求めんとす。是れ我が性向の要求するものは得ること能はずと雖も、汝の恩寵のみは我に滿ち溢るゝを得ればなり。設令我幾多の艱難に依りて誘惑せられ、窮迫せらるゝも、汝の恩寵だに我と借に在らんには、我は聊かも之を怖れざるなり。之のみ、又之に依りてのみ我に能力あり、之のみ我を試み、我に祐助を與ふるなり。是れ如何なる敵にも勝るの威力あり。有ゆる智識に勝りて聰明なり。

汝の恩寵は眞理の同伴なり、修養の教師なり、心の光明なり、辛苦に於ける歡喜、悲愁の慰撫者、恐怖の驅逐者、敬虔の保姆、涙の母なり。之なくんば、我れ將た如

何。唯枯死せる枝、投げ棄てらるべき無益の土塊のみ。故に、嗚呼主よ、汝の恩寵を絶えず我に被らしめ、又従はしめ、我をして汝の聖子耶穌基督イエスキリストにありて、絶えず善業を爲さしめ給はんことを。アーメン。

### 第五十六章

己を棄て、十字架を負ひつゝ基督に  
倣はざるべからず

我が子よ。汝は汝自らを離るゝこと愈遠くして、我に近づくこと愈密なるを得べし。物質に執着するの念は決して心の平安を産む能はず、内に省み己を棄つるに依りて神は我等と偕なるなり。我は汝が背くことなく、咄くことなく、完く己を棄つるに努むべきを汝に望む。汝我に従へ。『我は道なり、眞理なり、生命なり』。道なくんば何處に行かんや。眞理なくんば何の智識か存せんや。生命なくんば如何にし

て活きんや。我は汝が則るべき道なり。我は汝が信ぜざる可らざる真理なり。我は汝が俟望せざる可らざる生命なり。我は犯す可らざる道なり、誤なき真理なり、窮まるべからざる生命なり。我は純直なる道なり、至高の真理なり、真誠の生命、祝福ある生命、創造せられたるにあらざる生命なり。汝にして若し我が道にあらば、真理を悟るべく、真理は汝に自由を與へ、而して汝は永遠の生命を確保せん。汝若し生命に入らば、誠を守れ。汝若し真理を知らば我を信ぜよ。汝若し完全ならんことを求めなば、其の所有を悉く賣れ。汝若し我が弟子たらんことを望まば、自らを悉く棄てよ。汝若し祝福ある生命を得んとらば、此の世を卑め。汝若し天に擧げられんことを願はば、此の世に在りては賤しかれ。汝若し我と共に統御せんことを欲せば、我と共に十字架を負へ。是れ唯十字架の僕のみ、祝福あり、且つ眞の光明ある道を發見し得べきが故なり。

嗚呼主耶穌よ。此の世に於ける汝の生活の狹隘にして賤しかりしが如く、此の世

には卑めらるゝも、尙ほ汝に倣ふを得しめ給へ。蓋し僕は其の主より偉大なる能はず、弟子は其の師に勝るを得ざればなり。汝の僕をして汝の生活を練習せしめ給へ。是れ我が救ひと、我が眞の齋潔とは此處に存すなればなり。此の外何事を讀み、又聞かんとも、我をして之に安息と歡喜とを置くことなからしめ給へ。

我が子よ。汝の知り又讀めるがまゝに、若し萬事を行はば、汝に必ず幸福あるべし。『我が誠を有ちて之を守るものは、即ち我を愛するなり。我を愛するものは我が父に愛せらる。我も亦之を愛して、彼に自らを現すべし』而して我が父の國に於て我は彼と共に坐すべし。

嗚呼主耶穌よ。汝の語りて約束し給ひし如く、之を實現せしめ、我をして其の慈愛に漏ることなからしめ給へ。我は汝の聖手より十字架を受けたり。我之を負ひぬ。而して汝尙ほ之を我が肩に置き給ふとも、假令死に至るまでも之を忍ぶべし。誠に基督者の生活は十字架なり。然も是れ樂園に導く手引なり。我れ既に發足せり、

焉ぞ歸るべけんや。我が企てたる所を放棄せんは道にあらず。

勇を鼓せよ、兄弟たち、我等共に進軍せん。耶蘇は我等と偕にあり。耶蘇のため我等此の十字架を企てたり。更に耶蘇のため、十字架に於て堅忍せん。耶蘇は我等の祐助者なり、又我等の嚮導者なり、先驅者なり。見よ、我等の君主は我等に先んじて入りぬ。而して我等のために戦はん。我等をして大膽に之に續かしめよ。何人か何等の恐怖に襲はるゝものぞ。戰場に壯烈なる死を遂ぐるの覺悟せよ、十字架より遁るゝの屈辱を取てする勿れ。

### 第五十七章

或る過誤に陥ることあるも尙ほ決して  
絶望すべからず

我が子よ。逆境にありて忍耐謙遜なるは順境にありて歡喜敬虔ならんより、我が一層嘉する所なり。汝に示されたる些事のために、汝何故斯くも沮喪するや。尙ほ之に勝る事に會するも、汝は搖がざるを要するなり。然れども之を咎めざるべし。是れ珍らしき事にあらず又新なる事にもあらず。而して汝の生命ある限りは、此の後絶ゆべき事にもあらず。何の艱難も汝に加へられざりし時の如くに剛毅なれ。汝は人の訴を聴き、又汝の語を以て之を勵すを得るなり。然も艱難の不圖汝の家に及ばんか、忠言も奨勵も汝に効なきなり。然れば汝が此の事に會ひて自ら經驗する如く、汝の甚だしき懦弱を意識せよ。然れども斯くの如き試練は、畢竟汝のために設けらるゝなり。

汝の全力を盡して怯懦を去れ。假令艱難汝の身に及ぶことあるも、之に服せらるゝ勿れ。又長く逡巡する勿れ。歡喜之に耐ふるの能なくば、せめては忍んで之を耐へよ。汝之を聞くを厭ひ、又之がために憤怒を感ずとも、堅く戒飭せよ。而して汝

の口より片語隻句の惡言をだに洩れざるに努めよ。基督にある小さきものは之に誤らるゝなり。現に荒へるの暴風は忽ち靜穩に歸すべく、衷心の憂悶は恩寵の恢復と共に慰藉せらるべし。汝若し我を信じ、度みて我に叫ばば我れ尙ほ活きて在り、汝を祐け、前に勝るの慰藉を汝に與ふべしと主は言ふなり。

靈魂の忍耐を一層堅からしめよ。而して、更に不屈の能力を準備せめよ。汝が絶えず苦められ、悲むべき誘惑に會するは、悉く空しきこととあらざるなり。汝は唯人のみ、神にあらず。汝は肉のみ、天使にあらず。天界の天使墮落し、第一の人は樂園を失へるを、汝のみ如何ぞ徳性の同地點に止まるを得んや。我は悲歎する者を安全堅固の地に伴ひ、己が弱さを知れるものを、我が天の榮光に至らしめたり。

嗚呼主よ。汝の聖語は祝すべきかな。蜂の蜜にも勝りて我が口に美はしきなり。其の事情の如何にもあれ、程度の如何に甚だしくもあれ、又如何なる種類の苦痛にもあれ、救ひの港に我と導かざるものやある。我に至善の目的を與へ、我に世より

遁るゝ幸福なる道程を與へ給へ。人を聖旨に留め給へ。嗚呼我が神よ、汝の聖國に誤なく之を導き給へ。アーメン。

## 第五十八章

至高の事情と神の秘密の審判は容易に討究すべからず

我が子よ。至高の事情と神の秘密の審判に就きて論争するを慎むべし。何故に此は放棄せられ、彼は斯く著しき慈愛に浴するか。或は將た一つは苦痛に陥り、他は夥しき利益を得るか。斯くの如きは人の量るべき範圍に超え、神の審判を探究せんは如何なる理性も推論も之に及ぶの能力を有せざるなり。故に汝の仇敵此等の事を汝に示し、或は好奇心に富む人ありて、問題を提供すとも、汝は預言者に倣ひて斯く答へよ。曰く『汝は義し、嗚呼主よ。汝の審判に誤なし』と。又曰く『エホバの

審判は義にして眞理に適へり」と。我が審判は怖るべきものなり、論ずべきものにあらず。蓋し此等は人智に依りて了解し得べきにあらずればなり。

之と等しく齋潔なる人々の功績に就きて、或は此れ彼れよりも潔く、一は他よりも天の王國に於て偉大なり等討究論争する勿れ。斯かる問題は往々争鬭と益なき論議を産み、傲慢と虚榮とを助長せしめ、斯くして一は傲慢に彼を探り、他は亦之を擧ぐるより、嫉妬軋轢を生ずるなり。斯かる事を知らんとして求むるは、其の結果の善なる能はず、正義の靈魂には苦痛を醸すなり。我は是れ軋轢の神にあらず、平和の神なり。而して平和は眞實の謙遜より齋さるゝ所以、自白に因りて來るにあらずればなり。

或は彼我其の情を運ぶの熱切に區別を爲すものあり。然も是れ人の情のみ、神より來れる情にあらずるなり。我は是れ總ての聖徒を造れる神なり。我れ彼等に恩寵を與へ、我れ彼等に依りて榮光を受けたり。我は各の有せし所を知る。我は我が至

善の祝福を與へて彼等を護りぬ。我は世の始めより我が愛するものを豫め知りぬ。我れ彼等を世より擇びたり。彼等先づ我を擇べるにあらずるなり。我れ恩寵に依りて彼等を招き、慈愛を以て彼等を捕へ、激烈なる誘惑の間より、安全に彼等を導きたり。我は彼等に榮光ある慰藉を與へ、堅忍の力を與へ、耐久の冕冠を其の頭上に授け與へたり。

我は首位と末座と其の何れをも認め、言ふべからざる慈愛を以て彼等を悉く抱擁す。我は聖徒の間にありて讚美せらるべく、萬事に勝りて祝福せらるべきものなり。而して彼等に何の功績なきを擧げて、我れ之を榮光ある地位に導き、豫め之を定めたるに因りて各に崇めらるべきものなり。故に我が聖徒の最微のものを輕んずるものは、其の最大の者をも稱揚する所以にあらず。其の小なると偉なるとを問はず、皆悉く我が造れる所なればなり。而して聖徒の何れを輕んずるも、是れ我を侮蔑する所以にして、又天の王國に於ける全員を辱むる所以なり。彼等は愛の羈絆に繋が



れて一となれり。其の思想、其の意志皆等し。而して皆互に相愛せり。

然れども尙ほ彼等は（是れ至高の事に屬す）相互を愛するに勝り、又自己の功績を愛するに勝りて我を愛す。彼等は己を忘れ、己の愛を忘れて、彼等の修養の結果到達せる我のみを只管に愛するなり。何者も彼等を束縛する能はず、何者も彼等を壓迫す能はず、是れ彼等は永遠の真理に充ち、不滅なる愛の焰炎々たるを以てなり。故に己を愛するの外餘事なき肉体的且つ物質的なる人々をして、擅に神の聖徒を論評せしめり。斯かる人々は敢て永遠の真理に準ずるにあらず、唯己が妄想に準じて之を附加減削するなり。

無智、殊に全く啓發せらるゝことなきもの頗る多し。彼等は淳潔なる靈的愛情を以て人を思ふこと絶えてなし。然も彼等は肉的情緒と、人的友誼とに引かれつゝ之に傾き、又彼等に赴く。而して彼等は自己の經驗せる地上の愛情を基として天界の事情を想像す。然れども不完全なる想像に描く所と、啓發せられたる人々が天來の

默示に依り見聞するを得たる所との間には、霄壤の差あるなり。

故に、我が子に、汝は其の智識を加ふべき益なき珍奇のものに携はるを慎むべし。よしんば神の國の最低の地位なりとも到達せんことを、汝が最大の事業又努力とせよ。假に他をして神聖に進ましむるの道を知り、天國に於ける最大の人物を列擧し得るの能ありとも、彼若し我が前に愈自ら遜り、其の智識を興へたる我が名に最大の讚美を獻げて起つにあらずんば、畢竟彼に何の益かある。之に反して最も厚く神に嘉せらるべきは、自己の罪惡の顯著にして、徳行の乏しきを耻ぢ、聖徒の優劣を論評するよりは、先づ己が之に遠きこと遙なるを思ふにあり。

人若し自ら満足し、敢て益なき論争を戒むるに至らば始めて善、然り至善にして且つ満足するを得べし。其の有する善事を己に依ると爲さず、悉く之を我に歸し、萬物を彼等に興へたる我が限りなき愛に歸するものは、自ら己が功績を誇らざるなり。斯くの如き人は神の幽玄なる愛に満たされ、溢れ漲るの歡喜を以て、又何の榮

光も幸福も望むの餘地なきに至るなり。最高の榮光を受くるの聖徒は己が眼に最も卑しきもの、我に最も近く、最も親しきものなり。故に斯く記さる。曰く「彼等其の冠を投げ出し、小羊の前に彼等の顔を伏せて、永遠より永遠に在するものを崇めたり」と。

神の王國に於ける偉大の人物を求むる多くは、自ら其の最微の地位だに達し得るや否やを知らざるなり。周圍悉く偉人に充つる天國に於て、最微の者たらんことは偉大の事實なり。蓋し彼等悉く神の子等と稱せられ、又神の子等たる所以なればなり。『小さきものを干となし、百歳にて死したるものを呪はれたる罪人とすべし』。是れ弟子等が何人か天國に大なるものぞと論争せる際、斯くの如き答を得たればなり。曰く「若し改まりて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ、然れば凡そ此の嬰兒の如く自ら謙たるものは、是れ天國に於て大なるものなり」と。

自ら小さき嬰兒の如く謙たるを欲せざるものは禍なるかな。天國の低き關門彼等

が入るに適せざるべし。此の世にありて、其の慰藉を優に有するものは禍なるかな。貧しきものは神の國に入るに當り、彼等は門戸に空しく涕泣しつゝ立つべし。卑しきもの喜べ、汝等貧しきもの歡びに満ちよ。若し小さくとも眞理に従ひて歩まば、神の國は即ち汝等の所有なり。

## 第五十九章

希望と信頼とは悉く唯神にのみ置

くべきに就きて

主よ。我れ此の世に於て何をか信頼せん。又普天の下如何なるものに依りてか我が最大の慰藉を得ん。嗚呼我が主なる神よ。汝は慈愛豊り知られざる神ならずや。汝在さずば我將た何處にか安んずべき。汝だに在さば何の災害か我に及ぶべき。我汝なくして富まんより、汝のために貧しからんことをこそ望むなれ。汝なき天國を

所有せんより、我は汝と共に地上を漂浪せんことを願ふなれ。汝の在す所こそ天國なれ。汝の在さざる所は死滅のみ、地獄のみ。汝は我が總ての希望なり。故に我は汝に向ひて微<sup>しほ</sup>を爲し號叫し又熱切に祈るなり。是れ十分信頼すべきものなく、我が必要に應じて四時我を助くる能力あるものなし。嗚呼唯汝のみ、我が神よ。汝は我が希望なり、汝は我が信頼なり、汝は我が慰藉なり、而して何事に於ても汝は我に最も誠實なり。

萬人悉く自己の所得を求む。然るに汝は我が救ひを贈り、我が益のみを謀り、我がために萬事を整へ給へり。汝は誘惑と艱難との間に我を暴露せしめ給ふ。然も是れ百千回汝の愛するものを訓練し給ふためにして、悉く我が益たるやう、之を處理し給ふ。其の何れの苦痛に當りてか、我が元來の慰藉に滿てると等しき、聖と讚美とを汝に獻げざるを得へきや。

故に、嗚呼主なる神よ。我が滿腔の希望、隱家と汝のうちに設く。汝に在りて我は艱難辛苦に安んずるを得。汝の外我が赴くに未だ曾て其の脆弱動搖頼むに足るものを發見したることなし。汝にして我を補ひ、祐け、勵まし、慰め、導き、護り給ふにあらずんば、群がる朋友も益なく、有力なる扶助者も補助するに由なく、遠慮に富む顧問も利ある忠言を與ふるなく、碩學の著述も慰藉を齎さず、如何なる場所も、如何に身を處し、如何に求むるも身を隠すの地を得ざるべし。

平和と福祉とを齎すに要あるが如く見ゆる總てのものも、汝なくんば虚空のみ。何等の幸福をも事實全く來たすを得ざるなり。故に汝は善の依りて起る根元なり。生命の高き、語及ばざる限り幽玄なり。萬物に勝りて汝を望むは汝の僕の最も力ある慰藉なり。故に我れ汝に我が眼を擧ぐ。慈愛の父、我が神よ。汝に我れ我が信任を寄す。汝の神聖なる宮殿たり、又汝の永遠なる榮光の玉座となるに適はしきやう、天の祝福を以て我が靈魂を祝し潔からしめ給へ。而して此の宮殿の裡、汝の稜威を穢し、汝の大能の眼を遮るもの全く跡を絶つに至らしめ給へ。汝の善の偉大なる

と、慈みの裕なるとに依りて我を護り、死の陰の谷にありて、汝より遠く追放せられたる汝の憐なる僕の祈りを聞き給へ、此の腐敗せる世の諸種の危険の間に、汝の最微の僕なる我が靈魂を防ぎ且つ護り給へ。汝に伴はるゝ汝の恩寵に依りて永遠なる光明の地に至る平和の道に我を導き給へ。アーメン。

第四卷

神との交通に就きて

譯者註 本卷中「此の禮典」と稱するはパンと葡萄酒とを以て基督の體と血とを記念すべし聖餐式を指せるなり。

潔き交際に至る敬虔なる訓誨

「凡て勞れたるもの、又重さを負へるものは我に來れ、我れ汝等を息ませんと主は宣ふ」

「我が與ふパンは我が肉なり。世の生命のために我れ之を與へん」

「取りて食へ、是れ汝等のために與ふる我が體なり。汝等斯く行ひて我を覺えよ」

「我が肉を食ひ、我が血を飲むものは我に居り、我れ亦彼に居る」

「我が汝等に言ひし語は靈なり、生命なり」

## 第一章

如何なる態度を以て基督を受けざるべからざるか

以上は汝の聖語なり。嗚呼基督よ。是れ素より同時に語られたるにあらず、又同所に記さるゝにあらずと雖も、永遠に亘るの真理なり。是れ汝の聖語にして真理なるが故に感謝しつゝ忠實に我れ之を受くべきなり。是れ汝の聖語にして汝之を口づから宣言し給へり。而して又是れ皆我が有なり。汝は之を我が救ひのため授け給ひたればなり。我が心に更に深く植ゑ付けられんがため。汝の口より喜びて我れ之を受く。此上なき恩寵裕なる聖語は我を起たしむるまで、美と愛とに満つ。然も我が罪惡は我が勇氣を挫き、良心の不淳は汝の幽玄なる秘義を聞くを我に許さざるなり。汝の聖語の美はしさは我を鼓舞奨励す。然も我が罪惡は群がり來りて我を壓迫す。

我汝のうちに進まんと欲せば、汝は必然我が汝に至るを命じ給ふ。而して我に永遠の生命と榮光とを慕ふの志あらば、不朽の糧を受くべきを我に命じ給ふ。「總て重きと負へるもの勞れたるものは我に來れ、我れ汝等を息ません」と汝は宣ふ。汝の至高至聖の體と血とを並び供へて貧しく乏しきものを養せんとし給ふ汝の聖語は、嗚呼、罪人の耳に限りなく美はしく慕はしきかな。嗚呼主なる我が神よ。然も敢て汝に進まんと自ら期する我はそも何者ぞや。見そなはし給へ、天上の天も汝を容るゝの値なし。而して汝は「汝等總て我に來れ」と宣ふ。

斯かる恩寵深き禮遇、斯くまでに愛に富む招待とはそも何の意ぞ。我が何處にか敢て汝に至たらんと思はるべき特質ありや。我れ斯く屢汝の恩寵深き面を犯しつゝ、如何ぞ汝を我が家に容れ奉るを得べきや。天使と天使長とは汝の稜威に撃たれ、齋潔正義の聖徒等も汝を畏る。然も汝は「汝等總て我に來れ」と宣ふ。嗚呼是れ汝の聖語にあらずんば誰か其の眞なるを信し得んや。嗚呼主よ、而して汝之を命じ給ふに

あらずんば、誰か汝に近づくとを得んや。見よなはし給へ。正義の人ノアは僅の人々  
 と共に救はれんがため、百年の久しき方船を造るに勞したるにあらずや。然も如何  
 なれば我れ一瞬時の間に、世界の創造者に歓迎招致せらるゝを得るや。

汝の偉大なる僕にして、汝の特殊の朋友たりしモウセは、汚れなき用材を以て契  
 約の櫃を作り、純金を以て之を蔽ひ、其の裡に律法の巻を納めたり。然も此の汚れ  
 たる物質の我、如何ぞ憚らずして律法の編制者、授與者を迎へ奉るを得んや。イス  
 ラエルの最賢なる王ソロモンは汝の聖名を崇むべき壯麗なる宮殿を築くに七年を費  
 し、而して八日の間獻堂の節を營み、宥恕の供物一千個を奉り、喇叭の響と大なる  
 歡聲と共に豫て用意したる座に慎みて契約の櫃を移したり。然るを人のうちにて最  
 も憐むべく最も卑しき、寸時も眞に敬虔の念を抱く能はざる我が家に、如何ぞ汝を迎  
 へ奉るを得べきや。尙ほ我れ半時の間も價值ある正しき方式に準じて之を過した  
 ることあらんや。

嗚呼我が神よ。斯かる人々に如何に汝を喜ばしめんことを努め、又工夫せしよ。  
 悲い哉、我が爲す所の如何に乏しきよ。汝の交情を受くるに我が準備する所のいた  
 くも時の足らざるかな。我が矯正する所少く、其の煩悶を棄て、自ら齋潔なること  
 我には絶えてあらざるなり。然も生命を與へ給ふ汝の、我がうちに在さんことを期  
 せんには、之に相適はざる思想の此處に侵入するを許されず、又我が心敢て物質に  
 領有せらるゝことなきを要するなり。蓋し是れ天使にあらずして、天使の主を我が  
 心に歓迎せんと欲するなればなり。

而して尙ほ其の表徴たる契約の櫃と、言ひ難く貴き徳性を有する汝の神聖なる體  
 との間、又來るべきもの、型なる形式上の犠牲と、有ゆる古の犠牲の意義を含める  
 汝の體の供物との間には著しき相違あり。然るに如何ぞ我は燃ゆるばかりの熱誠を  
 獻げて汝の貴臨を欽仰せざるを得べきや。然るに如何ぞ、我は工夫慘憺汝の神聖な  
 る賜を受くるの用意なきを得んや。古の師父、預言者、又王侯伯は民衆と共に汝に

奉事せんがため、敬虔の斯くも著しき熱誠を表せるを。

篤信敬虔なる王ダビデは昔其の祖先に與へられたる賜を想ひ起しつゝ、全力を盡して神の櫃の前に躍れり。彼は種々の樂器を設け、詩篇を編み、歡喜を謳歌するの伶人を備へたり。彼又屢自ら聖靈の恩寵に神興湧き起るがまゝ、堅琴を取りて謠ひぬ。更に彼は其の全靈を獻げ、日々祝福と讚美とに適はしき聲張り揚げて神を崇むべきをイスラエルの民衆に教へたり。契約の櫃の前に於て尙ほ且つ此の篤信敬虔の情を表され、神に對する讚美の獻げられたりとせば、最も貴き基督の體と血とを受くる禮典を行ふの間に、我と他の總ての基督者とは如何なる奉事を爲して可なるべき。

既に世を去れる聖徒の記念の地を歴訪し、彼等の行爲を聞きて欣慕の念に滿ち、彼等の建築せし壯麗なる神殿の威風に畏れ、其の記念すべきものに對して、情熱大いに勵くもの甚だ多し。然も見そなはし給へ、汝我が神、聖徒中の至聖者、人の創

造主、天使の王は汝の祭壇の上、我と偕にいまし給ふ。斯かる記念物を觀覽するも多くは其の好奇心を動かし、珍品を追うて眼を樂ましむるのみ、之がために何等自己を廓清するにあらず、殊に忍耐の志を缺き、浮薄に東西に彷徨する徒に於て然りと爲す。然るに此の神聖なる禮典に依りて、汝は全身此處にいます。我が神よ。人なる基督耶蘇よ。而して其の價値を有する敬虔なる徒には永遠の救てふ結果を與へ給ふ。此處に何の珍珠なく、好奇心を満足せしむべきものなく、耳目を樂ましむべきものなし。唯搖がざる忠誠、敬虔なる希望、眞實の慈愛あるのみ。

嗚呼神よ、目に見えざる世界の創造主よ、汝の我を俟ち給ふ聖業の奇しきかな、汝の擇び給ひしものに萬物を與へ給ふ汝の慈惠と恩寵とはとも如何ばかりぞや。汝は此の禮典に依りて我に己の身をすら響し給ふを。是れ人の智識の外にあり。是れ敬虔なる人の心をのみ曳く、而して彼等の情緒に焔を點するなり。よしんば其の全生涯を挺して向上の途にある汝の忠信なる聖徒と雖も、此の貴き禮典に依りて敬虔

に進むべき恩寵を加へられ、徳を愛する念を盛んにすること常なりとす。

獨り基督に屬するもののみ悟り得べき此の禮典に含まるゝ恩寵の、嗚呼甚はしくも亦奇しきかな。然も不信にして罪惡の奴隸たるに甘んずるものは、此の經驗を味ふ能はざるなり。此の禮典に依りて靈的恩寵は賦與せられ、靈魂を鼓舞すべき力は恢復せられ、罪惡に因りて汚辱せられたる美貌は挽回せらるゝなり。而して此の恩寵は獨り意志を鞏固ならしむるのみならず、又衰弱せる肉體に新なる精力を激増せしめ、以て敬虔の念に滿つるまで裕に加へらるゝを常とす。

然も我等の冷淡にして不注意なる、往々基督を迎ふるに其の情熱燃ゆる能はず、其の救はるべき希望の極致、我等功績の中心を忘れ去るは哀むべく、又憐むべきの至りなり。基督こそ我等が犠牲、又賠償にして、此の世に漂浪するもの、慰藉、又聖徒たる永遠の到着點なれ。然も世の多くは天界の歡喜を齎し、全世界を抱有すべき、此の健全なる神秘に思を潜むること稀なるは、誠に慨歎措く能はざる事實なりとす。

りとす。人の心の頑迷固陋にして、此の言ひ難き賜を深く顧慮せず、唯日々之と全く相距り行くは誠に悲むべきかな。

假に此の神聖なる禮典にして唯一箇所に於て、唯一人の祭司に依りてのみ行はるゝものとせば、世に唯一なる此の神秘の説明者として人は如何に其の箇所、其の祭司に對して熱烈なる望を囑すべきや。然るに今や人悉く祭司たり、到る處として基督は供せらる。而して神の恩寵と慈愛とは人に對して愈倍裕に、此の神聖なる交通は世の到る處に、更に深く行はるゝなり。嗚呼汝に感謝あれ、慈愛に富み給ふ耶穌よ、汝永遠の牧羊者よ、汝は窮乏放逐の状態にある我等に汝の貴き體と血とを饗して精力を與へ、汝の口づから授け給ふ聖語みことばをすら親しく受けんがために召し給ふ。曰く「總て勞れたるもの、重さを負へるものは我に來れ、我れ汝等を息ません」と。

## 第二章



神の至善と至愛とは此の禮典に依りて  
人に示さる

汝の至善と至愛とを信じて、我は汝に近づく。嗚呼主よ。我は病者の治療者、飢ゑたるもの渴けるもの、生命の泉たる汝に近づく。我は又天の王に服するため、我が主の僕の一人、創造者に對して受造者の一つ、慈愛の慰藉者に對する歡喜者の一つとして汝に近づく。如何なれば汝は我を顧みるの幸福を與へ給ふや。汝が己をすら與へ給はざる可らざる我は抑も何者ぞ。此の罪人の汝の眼に如何に映すべし。而して敢て其の罪人に接し給ふは如何なる故ぞ。汝は汝の僕を知り、彼に何等の嘉すべしものなきを知り給ふ。而して何に依りて此の慈惠を之に加へ給ふや。我は何の價なきを自ら告白す。我は汝の至善にいますを認め奉る。而して汝の溢る憐みを讚美し、人智に及び難き汝の慈愛を感謝す。然も是れ我がために、汝自ら爲

し給ふ所、我に何等の功績あるにあらず、唯汝の至善の更に深く我が認むる所となり、汝の慈愛のいやが上にも我に濺がれ、汝の恩寵深き謙遜の愈我がために竭されんことを目的として爲し給ふ。而して汝は之を喜とし、斯くあらざるべからざるを自ら定め給へり。且つ又是れ我に最も喜ぶべきと汝自ら認め、我が罪惡も遂に之を受くるの妨げたらざるが如くに處置し給ふ。

嗚呼至美至愛の耶蘇よ。何人も之を形容言明し得ざるべき高崇にして神聖なる汝の體と血とを受くるに當り、如何なる種類の禮儀感謝、間斷なき讚美を汝に獻げて可なるべき。然も當に崇むべき道と知らず、度みて之を受く可き望を抱く能ざる我は、如何にして汝の交際に與り、如何なる方法を以てか、我が主に接するを得べきや。

汝の前に全く己を屈め、我を蔽ふ汝の限りなき至善を崇むるの外、如何なる道も、思想もあるべからず。我は汝を讚美し、永遠に汝を尊崇す。我が神よ。我れ己を卑

み、汝の前に我が心の底より價なきを感じて己を呪ふ。見そなはし給へ、汝は至聖の至聖にいます、而して我は罪人の屑のみ。見そなはし給へ。汝は我に汝自らを傾け給ふ、然も我は汝を仰ぎ見る價値だになきものなり。見そなはし給へ。汝は我に望み給ふ、我と偕にいますは汝の聖旨なり。汝は饗宴に我を招き給ふ。汝は天より降りて世に生命を興ふる汝自身なる活けるパンを我に興ふるを望み給ふ。是れ天使等の食ふべき天國の糧即ちパンなり。

見よ、此の愛は何に困りて來れる。其の恩寵溢るゝ禮遇何故に斯くも深厚なる？嗚呼如何なる感謝と讚美か此の賜に對して汝に歸すべき？。之を設け給へる汝の掟や、嗚呼、限りなく妙なるかな。汝の己を食物として我に興へ給ふ此の饗宴の洵に美はしくも楽しきかな。嗚呼汝の事業の感嘆すべきかな。嗚呼主よ。汝の聖能は完く、汝の眞理は言語に絶えたり。汝語り給へば萬物成り、世界は其の命じ給ふまゝに造られたり。

全き信仰を獻ぐるの價値ある此の物質の限りなく感嘆すべきかな。而して是れ人智の及ぶ所にあらず。嗚呼我が主なる神よ。眞の神にして眞の人なる主よ。僅のパンと葡萄酒のみ。然も其れ汝の全身なり。而して是れ我等に盡さざるの祐けとなる。汝は宇宙の主にいますし、何人の助けをも要し給はず、然も此の禮典に依りて我等の間にも喜ぶ給ふ。汝は喜び勇む淳潔なる良心を以て、我が永遠の健康を獲るに適したるものとなし、汝自らの榮光のため、又汝に對する不朽の記念のために、特に定め給ひし此の禮典を受くるに適したるものとなさんがため、我が心と體とを潔め給ふ。

歡喜せよ。嗚呼我が靈魂よ。此の貴き賜に對して神に感謝せよ。涙の面怖に蔽はれ、汝に興へらるゝ此の偉高き恩寵を感謝せよ。汝此の神秘の禮典を想ひ起して、基督の體を受くるときは、汝は己が贖罪の事業を完うし、基督の功績の一部に興るを得るなり。蓋し基督の慈愛は決して減退するのときなく、其の贖罪の偉力は永劫に

衰ふることなければなり。故に汝は其の精神常に活々として、己を棄てつゝ救ひに赴く、此の偉大なる神秘に深き思念を潜めざるべからず。汝此の聖なる神秘の禮典に與るとき、宛然其の日基督始めて處女の胎内に宿り、又此の日十字架の苦難を受け、人類の救ひのため死し給ひしが如くに、其の偉大を感じ、新に感じ、又歡喜に満ちたるべからず。

### 第三章

#### 屢此の禮典に與るの利益に就きて

見よなはし給へ。嗚呼主よ。汝の賜に慰められ、聖なる宴筵に樂みを受けんがため、我れ汝に来る。嗚呼神よ。汝は貧しきものを招かんために此の賜を供へ給ふ。見よ、我が望み我が求むるもの悉く汝のうちに在り。汝は我が救ひなり、我が贖ひなり、我が望みなり、我が力なり、我が名譽なり、榮光なり。然れば此の日汝の僕

の靈魂を歎びに溢れしめ給へ。汝に向ひて我が靈魂を獻ぐ。嗚呼主なる耶蘇よ。我れ今度みと畏れとを以て汝を受けんことを望む。我れザアカイと共に汝の祝福を受け、アブラハムの子供に加へられんがため、我が家に汝を迎へんことを望む。我が靈魂は汝の體と血とに饑え、我が心は汝と偕ならんとして眷戀たり。汝自らを我に與へて満足するを得しめ給へ。汝の外何の慰めだにあることなし。汝無くんば我れ存在すること能はず、汝臨み給ふこと無くんば我れ忍びて生くる能はざるなり。故に我れ絶えず汝に接し、我が靈魂の藥餌として汝を受けざるべからず。然らずんば我れ此の天來の糧に飢えつゝ、恐らくは路傍に昏倒せん。最も慈みに富み給ふ耶蘇よ。汝會て民に説き、又病者を救ひつゝ、宣へり「我れ此の衆人を憫む。……飢えさせて去らしむるを好まず。恐らくは途にて惱まん」と。今此の禮典に依りて忠信なる者の慰藉として己を與へ給ふ汝は、等しく我を待遇し給へ。蓋し汝は靈魂に美味なる糧なり。而して汝を食ふの價值あるものは永遠の榮光に與り、又之を嗣ぐを得べきな

り。常に誤謬と罪惡とに陥り、忽ちに困憊衰頹する我は、間斷なき祈禱と懺悔とに依り、汝の神聖なる體と肉とを受けつゝ新にせられ、潔められ、又自ら燃ゆるを緊要なりとす。然らずんば其の久しき節制を破り、恐らくは我が潔き目的を放擲するに至るべし。

蓋し人の性向は、其の幼きよりして、既に邪惡に傾き、天來の贖に依りて祐けらるゝにあらずんば、忽ちに罪過に陥り去るを以てなり。而して此の禮典に依りて人は罪惡より挽回せられ、至善に赴くの力を與へらるゝなり。現に絶えず此の聖典に與りつゝ尙ほ怠惰冷淡なる我れ、若し之に回復せらるゝなく、此の偉大なる祐助を求むるなくんば、其の赴く所果して如何ぞや。我が日毎の状態も準備も整はずと雖も、尙ほ我は相當の時に於て神の秘義を受け、斯かる鴻大なる恩寵の頒たれんことを努むるなり。蓋し神を念とすること深く、敬虔なる心を以て愛する主を受くるものは、此の空しさ世にありて汝と距てらるゝ間、大なる慰藉は、唯一此の禮典のみ。

汝の溢るゝ慈愛を以て我等に垂れ給ふ禮遇は、嗚呼、誠に妙なるかな。嗚呼汝、主なる神よ。有ゆる靈性を造り、又生命を與へ給ふ神よ。困憊せる靈魂に臨み、汝の神性を以てして尙ほ飢ゑたる者を癒さんがため、人と爲り給へる神よ？敬虔なる情を以て其の主なる神即ち汝を受くる特權を有し、靈的歡樂に踴躍するを許さるゝ心と靈魂とは、嗚呼如何に幸福にも亦好運なるかな？嗚呼偉大なるかな彼等の屬する主や、嗚呼彼等の宿せる賓客の愛すべきかな？其の迎へたる友の彼等に忠信なるそも如何ぞや？彼等の抱擁せる夫の愛すべくも亦貴きかな？其の主や、其の客や、其の友や、其の夫や、實に愛すべき萬物に超えて戀すべく、熱望すべき萬物に超えて戀すべきなり。嗚呼最も美はしく、最も愛すべきは汝なるかな。天も地も、亦之を飾る森羅萬象も神の前には黙せしめ給へ。蓋し如何なる美、如何なる譽の之にあらんとも、是等は悉く汝の深厚なる禮遇に含まれざるなく、其の智限りなき汝の聖名の美しさと、恩寵裕なるとに比ぶべくもあらざるなり。

## 第四章

敬虔の念を有つて此の禮典を守るものには  
多くの利益を與へらる

嗚呼主よ。我が神よ。神よ汝は恩寵深き禮典に與り得べき價值と敬虔の念とを有せしめ、人がため、汝の賜を與へて汝の僕を護り給ふ。我が心を鼓舞して汝に向はしめ、我が因循なるを矯め給へ。此の禮典より泉の如く湧き出づる鴻大なる汝の賜を我が靈性に依りて味ひ得んがため、汝の救ひを受けて、汝に接するを得せしめ給へ。此の偉大なる秘義を見得るやう、我が眼を開き、搖ぎなき信仰を持し得るやう、我に力を與へ給へ。蓋し是れ汝の事業にして人の能力の及ばざる所、汝の聖なる啓導に依るにあらずんば、人の發見し得ざる所なればなり。是等の秘義は天使も尙ほ且つ了解するの能なき所、焉ぞ人の了解闡明し得べき所ならんや。然るに此の高遠

にして神聖なる秘義の何れの部分をか、我れ此の價值なく、塵芥に等しき罪人の探求闡明し得べき所ならんや。

嗚呼主よ。我は専心一意、善且つ堅實なる信念を持して汝の命じ給ふがま、希望尊崇しつゝ汝に近づく。而して人として又神として汝が此の禮典のうちにいますを眞實に確信するなり。我れ汝を受け、愛に依りて汝と合一するは汝の聖旨なり。故に我れ全心全靈汝を愛するの情に滿ち溢れ、曾て他の歡樂の入るを許さざるに至らんがため、汝の慈みと汝の特殊の恩寵とを哀求熱望するなり。蓋し此の至高至貴の禮典は我が靈魂と靈性との營養なればなり。靈的總ての病患を醫するの能藥なればなり。之に由りて我が弱點は補はれ、我が肉情は抔制せられ、我に望む誘惑は克服せられ、或は少くも其の勢力を研磨せられ、恩寵は愈益裕に、企てたる徳行は其の高さを加へられ、信仰は堅實にせられ、希望は愈盛なるを得、愛は燃えて其の深さに進むを得ればなり。

汝は度みて此の禮典を守る汝の愛し給ふものに、多くの賜を會て與へ、今尙ほ絶えず與へ給ふ。嗚呼我が神よ、我が靈魂の保護者、懦弱なる人類の鼓舞者、內的歡樂の賦與者よ。汝は慘憺なる苦痛のうちにある人々に溢るゝ歡樂を與へ、其の憐むべき奈落の底より彼等を救ひ、汝の保護を恃ましめ、更に新なる恩寵を下して、其の心に安息啓導を與へ、始めに不安冷淡の念を以て此の禮典に與れるものも、後遂に此の天來の糧と飲料とに啓導せられつゝ、進歩したる念を以て之に與るを得しめ給ふ。且つ之を守るに依りて、彼等の浮薄の如何に甚だしきか、彼等が汝より受くるの恩寵如何に裕なるかを、自ら深く認め、明かに省みんがため、汝は其の擇びたるものに臨み給ふ。蓋し彼等は自ら冷淡、怠惰、不虔なるものにして、唯汝の力に依りてのみ熱心となり、快活となり、敬虔の念に滿つるを得るなり。賜の衆に來りつゝ、多少の物を得ずして去るもの何處にあらんや。誰か炎々たる燭の傍に立ちつゝ、多少の溫氣を受けざるものあらんや。汝は不斷滿ち溢るゝ泉なり。永劫消ゆることなく衰ふることなき燭なり。

故に我れ若し此の滿ち溢るゝ泉に來りて其の望むがまゝに飲むを許されずとも、尙ほ我れ此の天の水管に我が唇を浸し、我が全く涸渴せざらんがために、せめては其の雫を受けて我が渴を癒さんことを望むなり。且つ我れ尙ほ天界に屬するの價なく、ケラビム、セラビムの如き愛に溢るゝを得ずと雖も、此の生命を與ふる禮典に度んで與るに依りて、天界の燭の一闪だも受けんがため、熱切に信念を耕して、我が心の準備を爲さんことを努むるなり。然も我に缺如する所は、汝裕なる恩寵に依りて之を我に與へ、我等を悉く汝に召さんとして宜ふ。曰く「總て重さを負へるもの、勞れたるものは我に來れ、我れ汝等を息ません」と。嗚呼慈み深き耶蘇よ、至高至聖の救主よ。

我は額に汗して勞作し、心の憂悶に苦められ、罪の重荷に堪へ難く、誘惑に迫られ、種々の慾情に纏綿抑壓せらる。然も我を助くるものなく、救ふものなし。嗚呼

汝主なる我が神、我が救主よ。我が有する所悉く汝に托す。汝は我を護り、永遠の生命に伴ひ給へばなり。汝の聖名みかどの榮譽と榮光とのために我を迎へ給へ。汝は我が糧、我が飲料として汝の體と血とを與へ給ひたればなり。嗚呼主なる神よ、我が救主よ。汝の秘義たる此の祭典に屢與るに依りて我が敬虔の念愈盛んに愈増し加へらるしを しめ給へ。

## 第五章

### 此の禮典の權威と之を行ふの資格に就きて

汝設令天使の齋潔とバプテスマのヨハネの節制とを有すとも、尙ほ此の禮典を行ふ價值ある能はざるなり。蓋し人の功績を以て達し得べき範圍にあらず。何人か基督の禮典を司り、之を守り、天使の糧を食する價あるものあらんや。天使にすら許されざるものを與へられたる人々の權威や實に大なり。此の秘義や實に大なり。教

會に於て至高の地位に選ばれたる祭司のみ、此の祭典を司り、基督の體を聖別するの力あり。神の命令と選擇とを被り、神の言ことを語る神の僕は實に祭司なり。然れども神は其の主動者、見えざる施行者にして、其の讚美を受くべく其の誠を守らしむべき目的者なり。

故に汝は、汝自らの感覺、眼に見ゆる表徴よりは、此の秀れたる禮典すてのうち、神の全能なるを認めて之を信ぜざるべからず。汝は畏敬の念を以て此の神聖なる事業に與らざるべからず。絶えず己を省み、之を施行するの權、監督の按手に依りて許されたる所以を考察せよ。見よ、汝は祭司となれり。主の禮典を司らんとすに聖別せられたり。汝忠信敬虔、神に此の祭を獻ぐるを務め、時を慮り、過誤なきを慎んで期せざる可らず。汝の重荷は取り去られたるにあらず。却つて今一層難き訓練を與へられ、一層其の節制を加ふべきを迫らるしなり。祭司は總ての恩寵に富み、他の好模範たる生活を送らざる可らず。其の生活、言語は普通人類と一般なるべから

ず。天に於ける天使、地に於ける完全なる人と等しからざるべからず。

神聖なる法服を纏へる祭司は、基督の代理者なり。然れば總ての希願謙遜を以て己がため又全人類のために神の聖旨を求めざるべからず。而して其の恩寵と慈愛とを求め得るまでは祈禱と奉仕とを廢す可らず。祭司は此の聖餐を守るに依りて、神を崇め、天使を歡び迎へ、教會をして敬虔の念に燃えしめ、生けるものを助け、死したるものを回顧し、總ての賜を受くるに適はしきものと進み得るなり。

## 第六章

### 禮典の前に當りて行ふべき靈的修養に就きての考究

我れ汝の價値を思ひ、翻つて我が弱點を思ふとき、嗚呼主よ、我れ殊に戰慄し、心に憂悶なき能はざるなり。若し我れ汝に赴き能はずば、我が生命は空しく、若し我れ

價なき己を省みれば、悲痛措く所を知らざるなり。故に我が祐助者、我が顧問と仰ぐは唯汝のみ。嗚呼我が神よ。

汝我に義なる道を教へ、多少の訓練を與へて、此の禮典に與らしめ給へ。汝を受くるに敬虔にして、教に適ふ準備を爲すの方を知るは我が益にして、汝の此の禮典に與りて力を受け、神の偉大なる犠牲の祭典に對し、準備を爲すの方を知るは、我に必要なればなり。

## 第七章

### 良心を明に探究して之を改善するの齋潔なる計畫に就きて

神の祭司は萬事に先ちて深き謙遜、敬虔なる祈禱、燃ゆる信仰、神の榮光を只管に求むるの志を以て、此の禮典を守り又之を受けざるべからず。汝の良心を努めて



省み、痛恨謙遜眞に懺悔しつゝ之を潔め、一點心に疚しき所なく、良心覺醒して、恩寵の座に進むの障礙なきを期せざるべからず。汝の罪惡を悉く思ひ起して痛歎し、殊に汝の毎日の汚行を悲み慨かざるべからず。而して機會ある毎に汝の道ならざる慾情より起る悲むべき邪念を心より神に懺悔せよ。

汝肉的にして、世に眷戀とし、其の慾情甚だ節制せられず、淫心尙ほ頻に動くを痛悔悲歎せよ。又汝の感覺を治めず、種々の空しき虚榮に纏綿せられ、物質に絶えず執着し、內的又靈的なるものを等閑にし易く、歡笑逸樂に傾きて、涕泣悔恨するの念を缺き、安を貪り、肉を喜び、生活と信念との嚴密を謀るに怠り、珍好を追ひ、美貌を求め、卑陋のものに眷戀として、貪婪飽くを知らず、吝かにして得るものに頑なに、言語に慎みなく、沈黙を厭ひ、動作に節度なく、行爲暴にして、食物に耽り、懇ふに早く、勞するに遅く、駁辯に敏く、聖なる奉仕に鈍く、成功を焦慮し、徒に彷徨して忍耐なく、祈禱を重んぜず、聖餐を守るに冷淡に、之を受くるに熱

心なく、慎みなく、忽ちに昏迷に陥り、自ら持する堅からず、直ちに憤り、他を嫌忌するの念を浮ぶること容易く、審判するに假借なく、非難を加ふるに峻嚴、得意に歡喜し、失意に沮喪し、善良なる決心を屢試みて、其の結果や常に憐むべきものなるを記憶せよ。

汝の薄志を悲み厭ひ、懺悔痛恨しつゝ、常に汝の生活の改善せられんがために鞏固なる意志を養ひ、至高の齋潔なる域に進むに努めざる可らず。節制能く努め、全力を濺ぎて、我が名のため、汝の心の祭壇に、燔祭を獻げ、我がために悉く汝の己を棄てざる可らず。斯くて始めて汝は神に對して聖餐を守り、我が體と血との禮典を有益に受けんがため近づき來るの價值あるものと認めらるゝを得るなり。

蓋し基督の體と血との聖なる交際に依り、單一專心神に己を獻ぐるに勝りて價值ある祭物なく、罪を亡す術他にあることなし。人若し自ら欺くの所業あり、或は悔恨の情ある毎に、其の赦免と恩寵とを受けんがため我に來らざる可らず。主は曰ふ

「其の爲し、所の咎は皆記念せられざるべし。其の爲し、義しき事のために彼は生くべし。我れ等て悪人の死を好まんや、寧ろ彼が其の道を離れて生さんことを好まざらんや」と。

## 第八章

### 十字架上に於ける基督の祭物と我等の献身とに就きて

我が意志に従ひ、汝の罪惡のため、我れ己を父なる神に獻げたり。我が手は十字架上に釘打たれ、我が體は裸にせられ、神を和だめんがため悉く犠牲として供へられ、我に一物の剩す所もなかりき。之に等しく、汝も亦潔く又聖なる供物として、汝の力を盡し、愛を盡くし、有ゆる心の才能を盡し、此の聖なる交際に依りて、喜んで汝自身を獻げざるべからず。汝が全く我がために己を獻ぐるに勝る何物をか我

か我れ汝に求めんや。汝以外の何物を獻ぐとも、我が眼には更に價値を認めざるなり。我れ敢て祭物を求めず、唯汝を要するなり。

我を除きては萬物を有すとも汝幸なる能はずば、我も汝にあらざるものは、物の如何に拘らず之を受くるを喜と爲す能はざるなり。汝自身を我に獻げ、而して全く神に己を與へよ。汝の祭物始めて嘉納せらるべし。見よ。我は汝のため我が父に己を悉く獻げたり。而して汝の食物として我が體と血とを汝に與へたり。我は全く汝のものと成ることを得たり。されば汝も亦終りまで絶えず我がものたるを期せよ。然ども汝若し己に執着して、我に全く汝を獻ぐるを得ずば、汝の祭物は完からず、我との合一は完全なる能はざるなり。故に汝が百行の前、先づ己を祭物として進んで神に獻げざるべからず。汝の希望する自由と恩寵とは之に依りて獲らるゝなり。然れども己を全く棄つるを敢て爲す能はざるがため、心に自由と啓導とを與へらるゝもの極めて少し。我が宣言に誤なし。曰く「其の所有を悉く捨てざるものは我が弟

子と爲るを得ず』と。汝若し我が弟子とならんことを願はば、汝の全心全靈を盡して己を我に獻げざる可らず。

## 第九章

己と其の有する所とを悉く神に獻ず、而して

總てのものに就きて祈らざるべからず。

天の上地の下にあるも悉く皆汝のものなり。嗚呼主よ。我は自由なる祭物として汝に己を獻げ、且つ永遠に汝と偕ならんことを望む。嗚呼主よ。我は今日専心一意己を汝に獻げ、遷りて汝に服従し、永遠なる讚美の祭物、又永遠に汝の僕たらんとす。汝に事ふる目に見えざる天使の前に、我が獻ぐる己と、汝の貴き體の祭物と共に受けさせ給へ。而して之を我と總て汝の民との幸福たらしめ給へ。

我が始めて之を行ひ得たる頃より、今日に至るまで汝の前に犯せる一切の罪惡及

び過誤を總て汝に獻ぐ。嗚呼主よ。汝の愛の焔に依りて燒棄滅却せられんがため、我が罪惡を汝の慈みの祭壇に獻ぐ。汝は悉く我が罪惡の汚穢を洗ひ去り給ふ。總ての過誤を矯正し、我が總ての過誤を赦し、平和の接吻を以て我を迎へつゝ、我が罪のために失へる汝の恩寵を再び我に與へ給へ。

遷りて我が罪を懺悔痛恨し、絶えず汝の慈愛と赦免とを請ひ求むるの外、我が罪に對して我れ何をか爲し得んや。我れ汝に求む。我來りて我が神なる汝の前に立つとき、我に耳傾け給へ。我が夥しき罪過は我には甚だ嫌惡すべきものなり。爾後我れ又之を犯さざるを願ふ。然も我れ此の世にある間は此の悲みを免るゝを得ず。之を悔い改め。我が全力を竭して之が贖を爲さんことを期す。我を赦し給へ。嗚呼神よ。汝の聖名のために、我が罪惡を悉く赦し給へ。汝の此の上なく貴き血に依りて贖ひ給ひし我が靈魂を救ひ給へ。見そなはし給へ。我れ汝の慈みに己を委ね、汝の聖手に己を委つ。我が罪惡と過誤とに由らず、唯汝の聖心に從ひて、我を處置し給

へ。我が有する善事は悉く汝に獻ぐ。是れ不完全にして價值なきは勿論なりと雖も、汝は之を改善聖別し給ふべし。之を汝の嘉納し給ふに足るものと改め、絶えず之を補ひ給へ。而して此の怠惰にして益なき動物なる我を善良幸福なる域に伴ひ給へ。

我れ又敬虔なる人々が望む所の篤信なる熱望を汝に獻げ、両親、朋友、兄弟、姉妹、其の他我が親しきもの、己のため又人のために我が企てたる善業を、悉く汝を愛せんがために汝に獻ぐ。又我れ是等のために或は是等の人々の需用のために汝に祈禱せし所を悉く汝に獻ぐ。汝の恩寵を受くるの助けとなり、汝の慰藉を受くるの用意となり、危険を妨ぎ、苦痛より救はるべきものを悉く我に與へ、以て諸種の罪惡より脱却して、愈汝に感謝するの歡喜に溢るゝを得しめ給へ。

我れ又特に我に惡を施し、悲みを與へ、脅迫し、災害不幸を加へたる人々のためにする祈禱と和解とを汝に獻ぐ。我は又其の知りて爲せると知らずして爲せるとを

問はず、或は言語に依り、或は行爲に依りて、何れるときか人に加へたる障礙、艱難、悲痛、侮辱に對して汝に祈る。蓋し汝は人と人との間に犯したる罪惡を赦すを望み給へばなり。我は狐疑、忿恚、憤怒、争闘、及び何事に依らず愛心を傷け、兄弟的情誼を破るものを悉く我が心より取り去り給へ。嗚呼主よ。恵み給へ、嗚呼主よ、汝の慈みに憐るゝものに慈みを被らしめ、之を求むるものに恩寵を與へ、汝の恩寵に歡喜し、永遠の生命に進み入るの價值を我等に與へ給へ。アーメン。

## 第十章

此の神聖なる交際を廢するは此事ならず

汝は常に善と總ての齋潔との源なる恩寵と、神の慈みの泉とに助けを求め、汝の罪惡と肉情とを矯め、總ての誘惑と、惡魔の詐術とに對して愈堅固に立ち、且つ警醒せざるべからず。仇敵は此の神聖なる交際より來る偉大なる利益と與へらるゝ力と

を知りて、忠信敬虔なる人々が之に與ると防ぎ、又妨げんがため、あらゆる手段を盡すなり。

故に神聖なる交際に與るに適はしき用意を爲す人々は、前に勝るサタンの慫慂に苦めらるるなり。約百記に言へるが如く、惡の靈は其の慣用の毒謀に依りて人を苦め、恐怖と困惑とを以て之を遮り、其の熱情を銷磨せしめ、其の信仰を棄てんことを勧め、能ふ可くば、遂に此の交際を擲ち、或は少くとも之に冷淡たらしめんがため、人を説服せんとして汝の兒等の間に來るなり。然れども斯かる老猾にして空しき妄想に誘はれず、之に汚されず、脅かされざるを要す。而して之を惡魔の頭に應酬すべきなり。汝は彼を辱め、之を嘲り、敢て其の説く所に從ひて、此の神聖なる交際を廢すべからず、又汝の心に起る總ての困難のために、決して之を廢すべからざるなり。

敬虔の熱情を得んとして憂悶、罪の懺悔を爲すに當りて、不安の念は往々汝の妨

げとなることあり。賢者の誠に従ひて、汝の不安と憂慮とを棄てよ。蓋し是れ神の恩寵を受くるの妨げとなり、敬虔の情の漲るを遮るものなり。些細なる困惑艱難の故に此の交際を廢する勿れ。寧ろ進んで直に汝の罪惡を懺悔し、汝に加へられたる災害を喜んで赦せ。汝若し人を妨げたることあれば、邁りて其の赦を請ふべし。神も必ず汝を赦し給ふべし。

汝の罪惡を懺悔するを猶豫し、神聖なる交際に與るを逡巡すとも、汝に將た何の効かある。力の及ぶ限り速に己を潔くせよ。速に毒物を艾除せよ。速に神の贖を受くるの用意せよ。汝始めて遲疑逡巡せるに勝る利益を發見せん。汝若し今日之を廢せば、明日は恐らく之に勝る大なる妨げに會ふべし。而して汝は永く此の交際より遠ざかり、愈之を受くるに適せざるものとなるべし。汝は絶えず其の煩累怠情を棄てざるべからず。蓋し其の不安は、何時まで懷くとも益なく、其の擾亂したる良心と、此の神に對する奉仕より遠ざかるとは、汝に何の益する所も無ければなり。然

り、長く此の交際に遠ざかるは汝に大なる害となり、遂に靈性の惰眠を催すに至るなり。噫、其の罪を懺悔するに躊躇し、聖なる交際を廢するものは冷淡なる人々のみ。若し然らずとせば、彼等當に己を省みること更に嚴なるべきにあらずや。

此の神聖なる交際を輕々しく廢する人々の愛情や、乏しくも亦卑むべきかな。彼等の信仰や如何に薄弱なるかな。日毎に此の交際を爲すの用意を整へ、之を能く爲し得るの力を有し、又秘かに隠れて之を守るまでに其の生活を慎み、潔き良心を有する人々は如何に幸福にして又神の嘉せらるべきかな。人若し眞に謙遜なる心より或は又他の適當なる理由より之を禁ずるは、其の崇敬の念を失はざる限り、甚だ賞讃すべきことなりと雖も、若し靈性の怠慢より之を禁ずるの念あらば、己を勵まし、其の奉仕を敢て進んで行はざる可らず。主は必ず其の希望を祐け、神の殊に重んじ給ふ此の交際を爲すの善き志を與へ給ふべし。

尙ほ相當の理由ある障礙起りて之を守らざることあるも、絶えず志を堅うして之

を守ると等しき敬虔の念あらば、此の禮典に依りて受くべき酬を失ふことなかるべし。蓋し敬虔なる人は二六時中絶えず基督との靈的交際を保ちて、縱し有形の禮典に與らずとも、基督より遠ざかることあらざるを以てなり。然も尙ほ一定の時日に於て、人は特殊の崇敬の念を以て贖主の體と血とを受け、之に依りて己の慰藉を求めんよりは、寧ろ神の名譽と榮光とを求むるの心なかる可らず。蓋し基督の受肉と苦難とに度みて思を潜め、基督の愛の焰に燃ゆるの度に準じて、人は不思議に基督と交際して、其の神秘なる慰藉に力を與へらるゝなり。

其の祭日に際會し、或は事情に餘儀なくせらるゝにあらずんば、絶えて其の準備を爲さざるものは、決して用意周到なる人たる能はざるなり。此の神聖なる交際を行ひ、或は守ることと等しく、己を燔祭として全く主に獻ぐるものは幸なり。汝の共に生活する人々と、共に之を守り、敢て其の時日に私ある勿れ。汝他に對して因循ならざると共に性急ならざるに努めよ。己が念慮を擅にせず、汝の師父の指揮に従

ひ、又他の人々の訓誨に服するを努めよ。

## 第十一章

### 基督の體と肉及び聖書は篤信なる靈魂 に缺く可らざるものなり

嗚呼、慈み深き耶穌よ。汝の體と血とを饗せらるゝ宴筵に赴く篤信なる靈魂は、  
誠まことに幸なるかな！彼處あそこにありて食ふ可きものは愛する汝、景仰あやますべき萬物ばんぶつに秀れて  
景仰あやますべき汝を供せらるゝのみ。汝の聖前みまへに進み、我が心の底より涙なみだを流ながして、  
シメラの婦むすめの如く、汝の聖足みまへを洗ふの幸福は、嗚呼如何ばかりぞや。然も斯かる篤  
信なるもの今何處にかある。斯かる潔き涙の流、何處にかある。誠や我は汝と汝の  
聖天使との前にありて、全心こころに燃え立ちて泣くばかりに喜ばざるべからざるなり。  
是れ此の禮典らいでんに依りて、よし其の表徴ひょうていの下に隠れたりとも、尙ほ現に汝の在すを知

ればなり。

神の稜威りやういに輝く汝を見奉らんには、我が眼は遂に之に堪へざるべく、全世界も遂  
に汝の赫奕こくやくたる榮光えいこうを浴びて立つ能はざるべし。然るに今汝は此の物質的禮典ぶつしつてきでんに依  
り汝を蔽ひ、我が弱さを顧み給ふ。我は眞に汝を有し、天使の崇むる汝を崇む。而  
して同時に信仰に依り我は天使の親しく見ゆる、汝に蔽かきなくして見ゆるを得るなり。  
物質の影過ぎ去りて、永遠の曙あけぼのの來る日まで我は眞の信仰の光に依りて歩むに満足  
せざるべからず。完きもの來らんとし、此の表徴ひょうていに過ぎざる禮典らいでんは廢せらるべし。  
蓋し祝すべき天の榮光えいこうには此の禮典らいでんに依る贖あがなの必要なければなり。是に於て彼等は  
面の當り神の榮光えいこうを仰ぎつゝ永久に歡喜すべし。而して神の像かたちに従ひ、榮光えいこうより榮  
光に進みつゝ、始めよりいまし、永久にいます、肉體にくたいとなれる「神の道みち」味あじふを  
得べし。我れ此の驚くべきものに思の満つるとき、靈性の歡樂れいせいのかんらくすら我に物足らざる  
を感ずるなり。夫れ我が主を我が榮光えいこうのうちに見るまでは、如何なるものを此の世

に於て見聞せんとも、更に價なきを感ずるなり。嗚呼神よ、汝は悉く知り給ふ。何物も我を樂ましむるものなく、何物も我に安息を與ふるものなし、嗚呼我が神よ、唯汝のみ永遠に景仰すべきなり。然も我れ此の朽つべき肉に居る間は之を全うする能はざるなり。

故に我は自ら忍耐を養ひ、萬事に就きて己を汝に委ねざるべからず。蓋し現に天の王國にありて汝と偕に樂む聖徒等も、其の世に在りし間は、信仰と大なる忍耐とを以て、來るべき汝の榮光を俟望せるなり。彼等の信ぜし所を我も亦信ずるなり。彼等の希望せし所を、我も希望するなり。彼等の到達せし所に、我も汝の恩寵に依り到達せざる可らざるを信ずるなり。更に我は信仰に依りて歩み、聖徒等の實例に依りて勵まざるべしなり。我は又我が慰藉、我が生命の糧として聖書を有せり。尙ほ之に勝ると深き汝の體と血とを我が贖、我が隱家として有するなり。

此の世に在る我に取りて此の二つのものは格別に必要なるを感ずるなり。是れ無

くんば我を祐助保護するものなし。我れ此の肉體の牢獄に抑留せらるゝ間は、此の二つのもの即ち糧と光との我に最も必要なるを認むるなり。斯かる懦弱にして祐けなき我に、汝は汝の神聖なる體を與へ、我が體と靈魂との憩ひのために、我が足の燈なる汝の道を與へ給ふ。此の二つのものなくんば我は生くるの力なし。蓋し汝の道は我が靈魂の光明にして、汝の禮典は我が生命の糧なればなり。此の二つは又聖なる教會の寶庫に据えらるゝ二個の卓子なり。一は基督の神聖なる體のパンを供ふべき神聖なる祭壇にして、他は正しき信仰を人々に教へ、聖所の至聖所の帷幕の中にすら進み入るを得るやう、忠實に彼等を導く神の律法、即ち神聖なる教理を供ふべき卓子なり。汝に感謝あれ、嗚呼主なる耶蘇よ。汝永遠の光明よ。汝は預言者、使徒、教師なる汝の僕を以て我等に教理の卓子を据え給へり。

汝に感謝あれ、嗚呼汝創造主よ、人類の贖主よ。汝は全世界に汝の愛を現し、盛なる晚餐を供へ、我等に食物を供へ給ふ。然も表徴たる小羊にあらず、汝自身の



至聖の體と血として、此の聖なる宴筵に與り、總て篤信なるものは歡樂窮りなく、救の盃は滿ち溢れ、聖天使と共に樂園の樂みを擅にし、美はしさものに飽くを得しめ給ふ。

榮光の主の禮典を司らんがため聖語を與へらるゝ神の祭司は、嗚呼如何に偉大にして名譽なるかな。彼等の唇は之を祝し、彼等の手は之を捧げ、彼等の口は之を受け、又之を他に守らしむ。嗚呼其の手は如何に潔からざるべからざるか、其の口、其の體は如何に神聖ならざる可らざるか。至聖の主を絶えず迎へざる可らざる其の心の如何に穢れなきを期せざるべからざるか。基督の禮典を受くるものは齋潔の外何もあべからず。其の言語は善良且つ建徳の益あるものゝ外、口より發すべからざるなり。

基督の體に絶えず滲ぐの眼は、單純にして貞節ならざるべからず。天地の創造主の表徴は常に觸るゝの手は、齋潔に且つ天に向ひて掲げられざるべからず。祭司に關

し、律法は特に曰ふ「汝等は我の聖者となるべし。汝の神、我れエホバは聖ければなり」と。

嗚呼全能なる神よ、祭司の務に服する我等を、汝の恩寵に依りて祐け給へ。而して至聖至善の良心を以て、其の價值と敬虔の念とを以て汝の務を取るを得せしめ給へ。而して我が生活若し當に至るべき無垢の域に達せざるものあらば、少くも我等をして己が犯せる罪惡を悲歎し、謙遜なる靈性を以て、至善を専心志し、來るべきものゝため汝は熱信事ふるを得しめ給へ。

## 第十二章

基督と交際せんと欲するものは拮据奮勵  
之が準備を爲さざるべからず

我は淳潔を愛し、神聖を施すものなり。我は淳潔なる心を求めて、之を我が住居

の場所と爲す。大なる高樓を装ひて我がために備せよ。我れ我が弟子と共に來りて節を守るべし。汝若し我が來るを望み、汝と共に宿ると願はば、舊き穢れを拭ひ去り、汝の心の居室を清滌せよ。世と全く隔離せよ。罪惡の群衆を遠ざけよ。屋上の雀の如く、獨り坐せよ。而して汝の靈魂の悲むべき状態に就きて、汝の罪惡を思念せよ。蓋し愛を有するものは其の愛人のために最良最美の場所を具ふるなり。蓋し之に依りて其の抱有する愛情の深淺は知らるゝなり。

然れども記憶せよ。汝の如何なる所爲を積むも之が備を爲すの力なく、又全生涯を通じて務むとも、之に備ふるを得ず、其の心虚空坦懐なりとも、尙ほ定かならざるなり。然れども我が卓子に來るを許すは唯我が慈みと愛とにのみ依れり。宛然富者の宴筵に乞食の招かれたる如く、唯遜りて感謝を爲すの外、此の賜に對して何の應酬をか爲すを得んや。習慣に依らず、必要に依らず、唯汝の救主の體と血とを受くるの畏懼、崇敬、景仰の念よりして、汝に與へらるゝ汝の義務を盡し、勤勉之に當れ。

我は汝を擇べるものなり。我は誠を守るべきを命じたり。汝に缺如する所、我れ之を補はん。汝來りて之を受けよ。

我れ汝に敬虔の信念を與ふるとき、汝の神に感謝せよ。汝に其の價值あるにあらず。唯我が汝を慈むに依りて與ふるものなればなり。汝若し尙ほ之を有せず、乾燥枯涸せるを感せば、祈禱を務め、訴へて叩きて、救ひの恩寵の片々點滴をも與へらるゝ。まては已む勿れ。汝我を要す。我れ汝を要するにあらず。汝己を聖別せんがために我に來るにあらず、我れ汝を聖別せんとして汝に赴くなり。汝聖別せられんがため、我と一ならんがため、新なる恩寵を得て、生活の改善を企つるの奮發を爲さんがため、我に來れ、此の恩寵を等閑にする勿れ。唯拮据奮勵汝の心を整へて汝の愛するものを迎へよ。

然れども此の交際に與るの前に於て、獨り其の心の準備を爲すのみならず、尙ほ禮典を受けたる後も、其の志を堅く持續せざるべからず。前に準備せるに勝る敬虔の

念を持するに深く留意せざる可らず。是れ其の以後に於て謹慎警醒するは更に大なる恩寵を受くるの善き準備なればなり。蓋し人は物質的慰樂に耽ける甚だしければ、其の敬虔の念を損ふこと極めて大なるを以てなり。駄辯を避け、静かなる場所に退き、神と偕に樂め。全世界も之を奪ふに由なき神を汝は有せり。我は汝が己を棄て、暫しの憩ひを與へられ、己に依らず、我に依りて有ゆる煩累より脱却すべき神なり。

### 第十三章

敬虔なる靈魂は此の禮典に依り基督と合一せんがため其の全力を濺ぐを要す

我れ如何にしてか、我が全心を空しくして、唯汝のみを容れ、汝の居住を供へ、我が靈魂の熱望する如くに汝を樂むを得べきや、嗚呼主よ。爾後何人も我を注意せず、

如何なる物質も我を動かさず、何れの關係をも我に結ばず、唯汝のみ我に語り給ふを得しめ、我も亦汝に對して愛する者の其の愛人と語るが如く、友の其の友と宴筵を開くが如くならしめ給へ。我れ全く汝に合一し、我が心世の愛造物に曳かるゝことなく、此の聖禮典を絶えず行ふに依りて天界に於ける永遠のものを樂むの志、愈益盛なるに至らんことを請ひ求め且つ熱望す。嗚呼主なる神よ。何れのとさか我れ全く汝に合一し、汝に心を奪はれ、同時に己を全く忘るゝを得べきや。汝等我に居れ、さらば我れ又汝等に居らん』斯く汝と我と絶えず一なるを得しめ給へ。

誠に我は汝を愛し奉るなり。我が靈魂は生くる間常に汝と共に居るを喜ばんとし、て萬物の中より殊に汝を擇び奉りぬ。誠に汝は我が平和にいます。至高の平和、眞正の安息にして、汝に依りて我れ勞苦、悲痛無限の憂悶を免るゝなり。誠に汝は己を秘め給ふの神なり。汝は罪人と偕なり給はず、汝は唯謙遜單純なる心のものとのみ語り給ふ。汝の靈は、嗚呼美はしきかな。嗚呼主よ。汝の美はしきを其の子等に

示さんとして、有ゆる賜に充てるパンを以て彼等を養ひ、天より此の世にすら降り給へり。神に斯くも近き彼等に勝りて偉大なる國民何處にあらんや。而して我等の神なる汝は、汝に忠信なる人々の前にあり、日毎に之を慰め、彼等の心を天に向はしめ、又汝自身を之に與へ給ふ。基督者に勝る至高の榮譽を荷ふ國民何處にありや。普天の下、何處にか神自ら之を訪ひ、己の身を以て之を養ひ給ふ敬虔なる靈魂に勝る慈愛を他より與へらるゝものあらんや。嗚呼言語に絶えたる恩寵よ？嗚呼憐るべき禮遇よ？嗚呼特に我にのみ與へらるゝ量り難き慈愛よ？此の類求むべからざる恩寵に對して、我れ何をか酬い奉らんや。唯神に嘉納せらるゝべきは、我が心を全く我が神に獻げ、心より神に合一するに勝るものあることなし。我が靈魂全く神に合一するときは、我が心の喜や措く能はず。而して神は宣ふ。曰く「汝我と偕に在るを望まば、我も亦汝と偕なるを望むなり」と。而して我れ神に答へて曰ふ「嗚呼主よ、我と偕に宿り給へ。我と偕に在るを樂む。我が心の神と全く合一せんこと、是れ我が唯一の希望なり」と。

#### 第十四章

基督の體と血とを受くべき敬虔なる人々の熱切なる希望に就きて

汝を畏るゝものゝために、汝の供へ給ふ賜の裕なるは量り難し。嗚呼主よ。我れ汝の此の禮典に對し、異常の敬虔熱情を獻げて近づく篤信なる人々を想ひ起すとき、汝の祭壇、聖なる交際の卓子に望んで、我が冷淡不信を省み自ら困惑苛責するなり、嗚呼主よ。我れ汝の前にありて心に焰なく、多くの篤信なる人々の如く熱切に景仰、欣慕するの情なき我が枯涸冷淡なる狀を悲む。嗚呼主なる我が神よ。或る人々は聖なる交際に望んで熱切なる希望を有し、心の強烈なる情感より涕泣するを禁じ能はざりしなり。而して心身共に希望を有せし彼等は、彼等の飢渴の緩和満足せしめらる

故にあらず、唯歡喜と靈的熱情とを以て痛切に生命の泉なる汝を俟望せり。嗚呼斯くの如き熱烈なる信仰もがな？汝の聖なる存在を知る明もがな？蓋し彼等はパンを割くとき眞に主のいますを知り、汝、嗚呼慈み深き耶蘇イエズスの共に歩み、且つ語り給ふとき、彼等の心は燃えたるなり。斯かる熱切と敬虔の念、愛と情とは我を離るること遙なり。汝我に親み給へ。嗚呼慈み深き耶蘇イエズスよ。美しき恩寵裕なる主よ。若し汝の深き愛を受くるの價なかりせば、せめては此の聖なる交際の中に我が信仰愈篤く、汝の賜に對する我が希望彌増しに加へられ、一たび我が心に點ぜられたる愛の滅することなく、此の天來のマナの滋味永久に失はれざるやう、此の乏しき憐なる我を顧み給へ。

汝の慈みは我が熱望する恩寵を我に與ふるの力あり。汝愛の靈を以て我に望まんと自ら欲し給ふとき、恩寵を與ふるの力あるなり。特に汝に度み事へたる人々の如く熱烈なる希望に燃えずと雖も、尙ほ我れ汝の恩寵に依りて、是等熱信なる汝の景仰者

のうちに加へられ彼等の聖なる團體に數へられんことを衷心より祈りつゝ進むべき偉大にして切實なる望を有せんことを願ふなり。

## 第十五章

敬虔なるを得べき恩寵は自ら遜り己を棄つるに依りて與へらる

汝は絶えず敬虔の念を興へられんことを求め、熱心に之を祈り、忍耐と確信とを以て之を待望し、感謝に満ちて之を受け、之を保つに謙遜を以てし、拮据勉勵、神の臨み給ふ時と方法とは、神自ら之を可とし給ふまで、慎んで神に委ねざるべからず。汝の衷心敬虔の念乏しさを知らば、汝は一層謙遜なるを期すると同時に、絶望に陥らず、又餘りに悲痛せざるを要す。神は長く拒み給へる所を、瞬時に興へ給ふなり。而して神は其の祈禱の當初に得んことを望めるものを、其の終りに興へ給ふ

なり。

若し恩寵にして其の望むがまゝ忽ちに與へられんか、懦弱なる人は之を能く耐ふるを得ざるべし。故に敬虔の念を受くるの恩寵は、善良なる希望と遜りたる忍耐とに依りて俟たざるべからず。然のみならず、此の恩寵與へられず、又之を奪はるゝことある場合は、一に其の責任汝に存し、汝の罪惡に因するものと思惟せざる可らず。吾等に加へらるべき恩寵は、些細の事之が障礙となり、妨害となることあり。然れども此の恩寵を妨ぐるものは、設令些細と看做され、重要ならずと感ぜらるゝとも、決して輕々の事にあらざるを思へ。汝にして若し此の障礙の輕重に拘はらず之を交除克服せば、汝が希望する所を有するに至るべし。

蓋し汝が其の全心を獻げて、神に己を委ね、己が望む所に従ひて、彼此其の愛憎を擅にすることなく、全く神の聖旨かたじけなくのまゝに任すの刹那、汝は神と全く合一し、平安汝の上に至れるを發見すべし。神の聖旨かたじけなくを只管に樂むに勝る何れの歡喜、何れの

、悅樂か他にあらんや。心淳潔にして、其の目的を神に置き、物質に對して道ならざる存戀、憎惡の情を寄せざるものは、何人と雖も恩寵を受くるに最も適し、眞に敬虔の念なる賜を與へらるゝを得べし。蓋し主は空虚なる器を發見して、其の賜を之に満たし給ふを以てなり。故に人は物質を顧みるの念愈薄く、己を卑み己に死するのと愈全きに準じて、恩寵を與へらるゝこと愈速に、受くる所愈裕に、其の心は高きを望んで愈自在なるに至るべし。

斯くて彼は其の心の擴大となれるを自ら悟り、其の渺茫たるに自ら驚くべし。蓋し主の聖手かみ彼と共にあり、彼は全く己を神に委ね、永遠窮りなく主と偕なるを知るを以てなり。見よ、其の心の全力を盡して神を求め、其の靈魂に益なきものを受けざる人には、如何に幸福なるかな。斯かる人は聖餐に倍するに依りて、神と合一すべき偉大なる慈みを得るなり。彼は敢て己が敬虔の念と慰藉とを目的とせず、其の敬虔の念と慰藉とに超えて一つに神の名譽と榮光のみを求むるなり。

## 第十六章

必要なるものを悉く基督に仰ぎ、

其の恩寵を俟たざるべからず

嗚呼いと美はしく愛すべき耶蘇よ。今我れ敬虔の念を興へられんことを汝に望む。汝は我が浮薄なるを知り、我が求むべき必要なるものを知り給ふ。而して我れ如何に多くの罪惡邪念に包まれ、之がために墮落し、誘惑せられ、攪亂せられ、汚辱せらるゝかを汝は知り給ふ。贖はれんがため、又慰藉と祐助とを受けんがために我れ汝に往く、我れ萬事を悉く知り、我が心の思念を洞觀し、我を遺憾なく慰め、祐助するの力を有し給ふ汝に訴ふ。汝は我に最も必要なる賜と、我が總ての徳に於て乏しきとを知り給ふ。

見そなはし給へ、我れ乏しく裸にて、汝の恩寵を請ひ求め、汝の慈みを哀願しつゝ、

汝の前に立つ。汝の懇願者の饑渴を癒し、汝の愛の焔を以て冷却せる我を燃やし、汝の臨み給ふ光明に依りて我が替ひたるを啓發し給へ。我をして總て地上の物質を苦痛と感ぜしめ、悲惨にして嫌惡すべきものに忍耐せしめ、總ての卑むべき物質を輕んじ忘却するに至らしめ給へ。我が心を天にいます汝に轉ぜしめ、地に彷徨せんがために我を棄て給ふ勿れ。今より永遠に至るまで汝のみ我が樂みたるを得しめ給へ。蓋し汝のみ我が糧、我が飲料、我が愛人、我が喜、我が美、我が善にいませばなり。

嗚呼汝いますに依りて汝は我を燃やし、熱せしめ、汝に固く統ふるを得しめ給ふ。而して我れ我が心の汝に合一するの恩寵と熱烈なる愛の同化とに依りて、我が靈性全く汝と一なるを得たるなり。願くば汝より離れて、飢と渴とに墮つるを許し給ふ勿れ。而して汝の聖徒等に對して驚くべき處置を爲し給ひしが如く、我にもお慈み深き攝理を加へ給へ。此の薄弱虚空の我れ、若し汝に依りて熱せしめられれば、如何

驚くべき變化の起るべき。蓋し汝は絶えず燃えつゝ衰ふることなき焔にいませり。人心を淳化すべき愛、智慧を與ふる光明にいませり。

## 第十七章

### 基督を迎ふべき熱切なる愛心と

#### 強烈なる希望とに就きて

我が心の熱情と篤き信念とを獻げて我は汝を迎へんとす。嗚呼主よ。多くの聖徒と敬虔なる人々の、聖餐に與り、生活の齋潔なるを慕ひ、特に篤き信仰を有せし人々の如く、我れ汝を俟ち望む。嗚呼我が神、我が永遠の愛人、我が至善、我が盡くることなき幸福なる神よ。聖者が會て有し、又汝に對して感じ得べき限りの熱烈なる情緒と、畏懼崇敬の念を獻げて汝を迎へんことを望む。

我れ敢て敬虔の念を抱くの價値なきものなりと雖も、尙ほ且つ恰かも我のみ此の

熱烈なる情緒を有するかの如く、我が心の愛を悉く汝に獻ぐるを得しめ給へ。然り會て世にありし誠實なる人々が思惟希望し得べき極みを盡して、我れ畏敬、熱情を汝に獻げ、汝に進む。我れ自ら何物をも有するの望みを掛けず、我がもの悉く之を汝に獻ぐるを願ひ且つ喜ぶ。嗚呼主なる我が神、我が贖主よ。我れ汝の至聖の母處女マリアが神の受肉てふ喜の音づれを告ぐる天使に向ひ、篤信敬虔の念を以て「我は是れ主の使女なり、汝の語の如く我にあれかし」と答へつゝ、汝を迎へ、汝を望めるが如く、斯かる熱情、畏敬、讚美、頌榮、斯かる感謝、價値、愛心、斯かる信仰、希望、淳潔を以て今日汝を迎へんことを望む。更に祝すべきの汝先覺者、聖徒中の聖徒たるバプテスマのヨハネが、尙ほ母の胎内に閉ぢ込まれたる間に、汝の臨み給ひしを喜び、聖靈に感じて躍れる如く、又後に群衆の間を歩む耶蘇を見て、謙遜熱情を以て「新婦をもてる者は新郎なり。新郎の友立ちて其の聲を聞かば、之に縁りて喜多し、我れ今此の喜に満つるなり」と言へるが如く、我も亦偉大且つ淳



潔なる希望に燃やされ、全霊を盡して汝に己を獻げんと欲するなり。故に我れ凱旋の歡喜、熱切なる情緒、憧憬欽仰の念、敬虔より起る超自然的光明及び天上の幻覺、天地の間に會て存したる總ての徳性讚美の限りを盡し、又我が祈禱の間に命ぜられたる所と、又汝の讚美を受け給ふべき價値と、永遠の榮光に對して、汝に己を獻ぐるなり。

嗚呼主なる我が神よ。汝の無窮 稜威に對して、汝の當に受けさせ給ふべき、無限の讚美、無限の祝福を獻ぐべき我が希望熱情を嘉納し給へ。我れ此の讚美を汝に獻ぐ。而して日毎時毎に之を汝に獻げ、心を盡し情を盡きて天の諸靈と、總て汝に忠信なる僕等とを招き求め、我と共に此の感謝と讚美とを汝に獻げんことを望むなり。世に有ゆる人類、國民、國語は共に汝を讚美し、至當の歡樂と、熱切なる信念とを獻げて、汝の至聖至貴の聖名<sup>みたま</sup>を頌へしめ給へ。而して汝の至聖の禮典を畏懼敬虔の念を以て守り、篤き信仰に溢れつゝ之を受くる人々に、汝の聖手<sup>かみ</sup>に存する恩寵と

慈みとを發見するの價値を與へ、罪人なる我がために謙遜なる願を獻ぐるを得しめ給へ。而して彼等が其の望むがまゝの域に達し、汝と歡ばしき合致を爲し、汝の聖なる卓子より離れて美はしき慰藉と不思議なるまで力を與へらるゝあらば、嗚呼願くは彼等をして此の我が憐むべき靈魂を尙ほ記憶するを得しめ給へ。

## 第十八章

好奇心を以て聖餐を研究する勿れ唯基督の  
謙遜なる弟子たれ又神に其の感覺を全く獻  
ぜよ

汝若し懷疑の深淵に墜落するを虞れなば、此の至聖の禮典に就きて好奇心と益なき研究とを避けざる可らず。我が稜威を漫に討究するものは、其の榮光のために壓伏せらるべきなり。夫れ神は人の智慧に超えたる事業を爲すの力あり。但し眞理に

對する當然にして、謙遜なる研究は勿論此の限りにあらず。我等は常に教會の重大なる教理を學び、又考究するの特權を有す。

然れども疑義爭論を避け、神の誠の平坦にして、且つ鞏固なる道を進まば、單純にして且つ幸福なるを得べし。多くの人々は漫に高さものを求めつゝ、其の信仰を失へり。夫れ信仰は汝の事業と誠實なる生活とに依りて求めらるべく、決して智識の高さと、神の秘義を探究する深さとに因るにあらず。汝の下にあるものをすら了解考察し能はずとせば、如何ぞ汝に超越せる事物を明かにするを得んや。神に己を委ねよ。而して謙遜して汝の感覺を信仰に委ねよ。智識の光明は汝の益となり必要なる度に従ひて汝に與へらるべし、

或は信仰と此の聖禮典に當りて悲惨なる誘惑に陥るものあり。然れども是れ彼等の責任にあらず、仇敵の所業なり。汝之がために困却する勿れ、汝の思想と争ふ勿れ、又惡魔の誘ふ疑惑に答ふる勿れ。唯神の語を信ぜよ、神の聖徒と預言者を信ぜよ。

斯くて姦惡なる仇敵は汝より遁れ去るべし。神の僕は時に此の種の努力を爲すと益ありとす。蓋し惡魔は既に己が有に歸せる不信罪惡の徒を誘惑することなし。唯篤信敬虔なる人々を種々に誘ひ苦むるなり。

然れば單純にして疑ひなき信仰と、此の禮典に依りて汝の獲得せる畏敬の念とを保持して進め。其の了解に苦むものは、猶豫なく全能の神に委ねよ。神は汝を欺かず、己を待むものは却つて欺かるゝなり。神は單純なる人と共に歩み、謙遜なるものに己を示し、小さきものに智慧を與へ、淳潔なる人々の心を啓き、奇を好み傲慢なるものには恩寵を秘め給ふなり。人の理性は力なく欺くに易し、然も眞の信仰は之を欺くを得ざるなり。

總ての推理と道に適ふ考究とは、信仰に隨つて爲すべきものにして、信仰以上に之を重んじ、或は之がために信仰を破らるべきにあらずるなり。蓋し信仰と愛とは、此の至高、莊嚴なる禮典に當りて特に指針となり、暗々裡に其の作用を爲すべきも

のなり。永遠にして推理に超越せる神は、其の窮りなき能力を以て、天地の間に鴻大にして討究すべからざる事業を行ひ、然も其の痕跡を留め給ふことなし。神の事業果して斯くの如しとせば、之を人智に依りて恰かも了解し得べきが如くに、或は不思議と稱し、或は言明すべからずと爲す能はざるなり。

## 基督の模倣終

### 和譯に就きて

本書は原、拉典語を以て著され、聖書の存する國として、其の翻譯を有せざるなしと言ふも過言にあらざるべし。其の英譯の如きは韻文譯あり、經書體翻譯あり、註釋的散文譯あり。余の別に求めずして知れるもののみを以てするも、其の數實に六種に及ぶ。

余は最も多く見受けらるゝ經書體翻譯にして、其のトマス・ワイ・クロウエル會社出版(譯者不詳)に係るものを基礎とし、王室禮拜堂牧師にしてキャンタア・ベリーのデキインたりしジョウルジ・スタンホオプ博士の註釋的散文譯(千六百九十六年初版)を參酌し、英文より重譯したるなり。特に一種の英譯にのみ準據せざりしは、本書の威嚴を傷けざると同時に、又一般に了解せられ易きを期するがためのみ。

千九百十年仲春

洛東吉田山麓の寓居に於て

日高善一識す

### 本書と其の著者

本書の著者トマス・ハムマアケンは千三百八十年普露西亞ライン州のケムビンに生る。父の名はジョハン、農を業とす。母はゲルナルウトと呼ばれ、村の小學校を司れり。トマスは其の第二子に當る。當時ネザアランド、デヴェンタアの地に、碩學ゲルハルド・グルウドの創立に係る有名なる學校あり。トマス十二歳、其の兄と共に送られて此の校に學ぶ。時の校長フロレンチアス・レエドウキンはグルウドの高弟にして、いたくトマスを愛せり。同窓はトマスを呼ぶに『ケムビンより來れるトマス』即ち『トマス・ア・ケンピス』と言ふ。グルウドが制定せし校則に曰く、

福音を以て萬事の基とせよ、研究の礎とせよ、又生活の模範とせよ。是れ基督の品性を身に描くの道なり。斯くて汝等は使徒行傳及び使徒の教訓、聖保羅の書翰、師父等の生活並に教義と其の事業に、追加を爲し得る所以なり。

と。トマスは斯かる校則の下に養はれ、後ズウォルに近きセント・アグネス山に結ばれたるアウガスチン派の團體に投じたり。後千四百七十一年九十歳を以て世を終りぬ。

トマスは頭腦明晰、思想豊富にして、アグネス山中修養の餘、著す所の書籍頗る多く、四十歳の當時、本書『基督の模倣』を記述せり。古來世に存する書籍にして、敬虔熱誠の情漲れるもの蓋し本書の右に出づるものあらざるべし。フオンテネル之を評して曰ふ「人の筆に産せし最大の書籍なり。蓋し福音書は神の啓示に由れるものなれば」と。

千六百九十六年スタンホオブ博士の譯書英國に於て初版を發刊し、千八百〇九年までに第十七版を重ねたりと云ふ。其の他英譯の種類は其の數を知らず。今日も尙ほ典型文學叢書の新に編輯せらるゝ毎に、本書を加へざるは甚だ稀なり。思ふに他の諸國に於けるも亦之に相若くものあらん。過去數世紀に亘る生命を有しつゝ、尙

ほ續々新版を發兌せらるゝ本書の價值や言はずして既に明かなるべし。

世往々本書説く所の形式に拘泥して、忽卒に其の價值を論ずるものあり。蓋し時世の推移を察して、之が精神を活用する智なさの罪歟。

明治四十三年四月廿五日印刷

明治四十三年五月五日發行



著者の模倣

定價金七拾錢

著者 日高善一

發行者 山縣文夫

東京府下北野島郡果郷町大字上駒込十九番地

印刷者 藤本兼吉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所

東京北豐島郡巢鴨町上駒込二十番地  
電話(長距離加入) 下谷四百三十八番

内外出版協會

(振替貯金口座東京三百五十五番)

松本起  
編著

# 基督

再版  
定價金壹圓貳拾錢  
郵稅十二錢

## 護教批評

世界三聖傳の一として「基督」出てぬ。若者は誰ぞ。曩にシエンキヤナ作「何處に往く」を譯し文名を知られたる松本氏なり。至聖基督を傳せんとなせば、若者先づ深く彼を渴仰し、彼の人格に觸れ彼の精神を攝取せざるべからず。若し著者にして此の域を去ること遠からんか、其の材料は如何に豊富なりとも、其の評論は如何に犀利を極むとも、是れ死せるナザレの工匠を畫くに過ぎず、括ける基督の胸臆に宿れる神靈靈光は焉ぞ此の如くにして傳ふべけんや。若者松本氏は弱冠にして信仰の門に入り、諸先輩に私淑して心靈上修むる所淺からず、ますます基督の堂奥に達せんと欲して潜心基督の生涯を研究し、其の結果を發表せるもの本書即ち是れなり。著者の如きは洵に基督を傳するに適せりと謂ふべし。著者は重にも材料をデザイン・フアラ一の「基督傳」及びデビッド・スミスの「基督在世の時」に採り、簡潔なる筆を以て趣味深く記述せり。我が邦未だ完全の基督傳あらず、竹越氏の「基督傳」海老名氏の「基督傳」ストーカー、ニコル、ブローダス、ルナン等の譯書等稍々見るに足るものありと雖も、繁簡宜しきを得て中正不偏なるもの少きを憾みとす。此の時に當り本書の出版ありしは、基督教文學の爲めに慶賀せざるを得ず。惟ふに基督傳の研究は、直ちに基督教の中心に接觸し、堅實なる信仰を樹立するの基たるべし。吾人は此の良書を世に推薦するに躊躇せざるなり。

東京貯蓄會協版出外内 元版

シエルトン原著 宮崎八百吉譯

# 舊約聖書物語

四六八頁  
定價金六拾錢  
郵稅六錢

修身處世の  
秘訣を悟る  
に益あり文  
章流麗

文章流麗非  
常に面白く  
有益な書物

歐洲の文學を修むる者は必ず先づ聖書に舊約全書の話を通り知らざる可からず、否らざれば歐洲文學の本源を窺ふを得ず。其の中物語は單に宗教の一點に止まらず、人事百般の経験と人情の機微とを穿ち居れば、其深遠なる意味と天來の教訓とは、修身處世の秘訣を悟るに益あり、虚心平氣に考ふれば、西洋の文學にこれほど興味あるものはあらじ。何人が讀みたりとて毛嫌ひするの患なれば、別段宗教臭くもなく、流石に明治の一文士として、又嘗ては監牧の職に就きし経験ある人の事なれば、能く原文を咀嚼し、流麗の筆致讀者を飽かしめざる概あり。四六八判三百二十七ページの大作なり。

この書は、皆様が御承知の舊約全書のお話を、やさしく書きなほしたものですが、もと、米國の少年少女に讀ませるために書かれたものより、更に日本語に翻譯したもので、文章は流麗で、少年少女の好解し得るやうに譯されてあります。而もこれは、基督教信者の非常に面白くて有益な書物です。その他少年少女のためにも、(少女世界)

東京貯蓄會協版出外内 元版

The Three Momes

# 庭家三

版再

(錢貳拾稅郵 圓壹金價定)

博士 フアラ 原著  
 海老澤亮 譯述  
 法學博士 新渡戸稻造 序文  
 農學博士 原田助 序文  
 同志社社長 原田 序文  
 神學博士 ギュリッ 序文

### ▲新渡戸博士序文の一節

同志海老澤氏、有名なる英書「三家庭」の翻譯を公にせらる。行文流暢にして章句簡淨、よく原文の妙趣を傳へて而かも邦人の理解に易からしめたる叙述の巧なる、眞に一讀卷を捨つるに忍びざらしむ。實に是れ我國現時の家庭に推獎する能はざる好文なり。余は日本教育の爲に此書の廣く日本家庭の間に行はれんことを切に祈る。

### ▲原田同志社社長序文の一節

純良なる品性を養成し高潔なる情操を鼓吹する本書の如きは、誠に家庭小説の上乗なるものと謂ふ可し。予は原書が英米の多くの家庭に珍重せらるるが如く、此譯書が我多數の家庭に歡迎せられんことを切望して已まざる者なり。

著原ソトスーサ  
譯雨紅川碧

# 正僧年少小説

錢八稅郵 圓壹金價定 本美綴スロク

トードと云ふ不良少年が、慈愛に富めるブルックス僧正より温かき一言を與へられたるが動機となりて、從來の素行を悔改して新生涯に入り、漸次其の身を勞役して弱者を救ひ憐れみ、殊にトードの犯罪の爲め行衛不明となり遂に墮落の淵に陥れる少年を救ひ出し、共に益々光輝ある愛の生涯を送るといふ**感化小説**なるが、此間に配するに可憐にして敬虔の念深き少女、愛子の墮落を嘆く母、人の愛を嫉む書記、慈愛に富む貴夫人、小學校教師等を以てしたる外電車の運轉手車掌の同盟罷業の活劇などありて**結構非常に面白き**が上に譯文亦流麗にして、此種の物に免れ難き晦澁にしてバタ臭き所なければ、何等の苦痛なく愉快に讀ましむ。吾人の如きは一讀卷を閉づるに忍びず、三讀を重ね、多大の教訓を受け、第二の噫無情を讀むの感を起さしめたり。實に近來になき良書といふべく、譯者の勞を謝すると共に汎く江湖に推獎するものなり。

(報知新聞)

會協版出外内

地番十二込駒上町鴨巢京東  
番五十五百三東京金野管

元版



内外出版協會編

# リンコルン一代記

## ▲リンコルン百年祭記念

クロス製 定價金七拾錢  
頗る美本 郵税 六錢

- 父母 學校時代 移住 新家屋 銃獵 死別 愛讀書 仲裁者 謝罪 大統
- 労働 争闘 相撲 商業 沈勇 戦争 忠告 獨學 辯護士 政治家
- 白館生活 兵士の父 再選 悲劇

(本著世界の批評) 此の書は米國近代の偉人リンコルンの一代記を子供に讀ませるやう極めて平易に譯述したるものなり。偉人の生立、家庭、學校時代、愛讀書、労働等より、後日立身して政治家となり、大統領に上りし事までを一部の物語として記したるものにて、少年に向つて勤勉、忠實、立志、自助、正義、博愛等、あらゆる美德をすすめ、人格の修養、立志の模範として讀むべき良書なり。

◎リンコルンの生れたる丸太小舎  
◎おぢいさんは土人のために非命の最後を遂げた  
◎リンコルンの用ひたる斧  
◎夜になると壁に薪を燃やして木を讀む  
◎墓前にてエルキン氏の説教  
◎ミスシッポ川の平底  
◎リンコルンは立上りながら手をひらき、土人のかげひ「待て」と一言高く叫んだ  
◎ニヒリの高貴  
◎大統領就任式の演説  
◎大統領リンコルン  
◎奴隷解放令の朗讀  
◎リンコルンが實地に行はれた  
◎殺された時  
◎リンコルンの持つて居た芝居の番附  
◎兇漢

元版 東京 芝罘 北京 天津 漢口 上海 烟台 青島 濟南 濰縣 煙台 龍口 威海衛 營口 奉天 長春 哈爾濱 滿洲里 海拉爾 齊齊哈爾 佳木斯 牡丹江 通遼 錦州 安東 瀋陽 四平街 延吉 琿春 敦化 蛟河 磐石 舒蘭 德惠 九台 農安 梨樹 雙陽 伊通 乾安 扶餘 大安 鎮賚 洮安 洮南 通榆 乾安 鎮賚 洮安 洮南 通榆

# 日曜御伽草紙

全一册 定價金廿五錢 郵税二錢

原正男譯編  
日曜學校及び基督教を奉ずる男女學校に附屬する各種初等學校に於て、修身訓話を授くる際の用書として、又生徒に與ふる賞品として、最も恰適なる書が出来ました。趣味あり教訓ある御伽話二十五篇、何れも材を事實に取りて基督の訓言に添ふ所あり、而も少年少女に十分なる感興を起さしむるに足るのであります。故にまた之を一般家庭に備へてお子供衆の讀み物としても宜しい。これを読む少年少女諸君の内から、三人でも五人でも、善良な人となつて眞面目に正しく世渡りしやうと志す人が出来れば我が願足るとは譯者の言であります。

- ▲日光の壇話 ▲貪食の蛇 ▲復活の話 ▲船長の話 ▲雨 乞ひ
- ▲鸚鵡の話 ▲やどかり蟹 ▲馬喰の話 ▲馬と犬の教訓 ▲小燈臺守
- ▲知更鳥の巢 ▲煙突の上の人 ▲音楽と小動物 ▲勤勉な青年 ▲迷へる羊
- ▲感心な少女 ▲難船と犬 ▲鱧乳石洞に於ける ▲習慣の力 ▲クリスマス話
- ▲搖籃の小猫 ▲奇妙な家 ▲真珠採り ▲卵を賣る少女 ▲他人の危時

元版 東京 芝罘 北京 天津 漢口 上海 烟台 青島 濟南 濰縣 煙台 龍口 威海衛 營口 奉天 長春 哈爾濱 滿洲里 海拉爾 齊齊哈爾 佳木斯 牡丹江 通遼 錦州 安東 瀋陽 四平街 延吉 琿春 敦化 蛟河 磐石 舒蘭 德惠 九台 農安 梨樹 雙陽 伊通 乾安 鎮賚 洮安 洮南 通榆

●●●●● 佐々木邦譯述 ●●●●●

滑稽と趣味の無盡藏

いたづら小僧日記

定價金四拾錢  
郵稅四錢

續いたづら小僧日記

定價金參拾錢  
郵稅四錢

おてんば娘日記

定價金參拾錢  
郵稅四錢

法螺男爵旅土産

定價金貳拾錢  
郵稅四錢

ドン・キホーテ物語

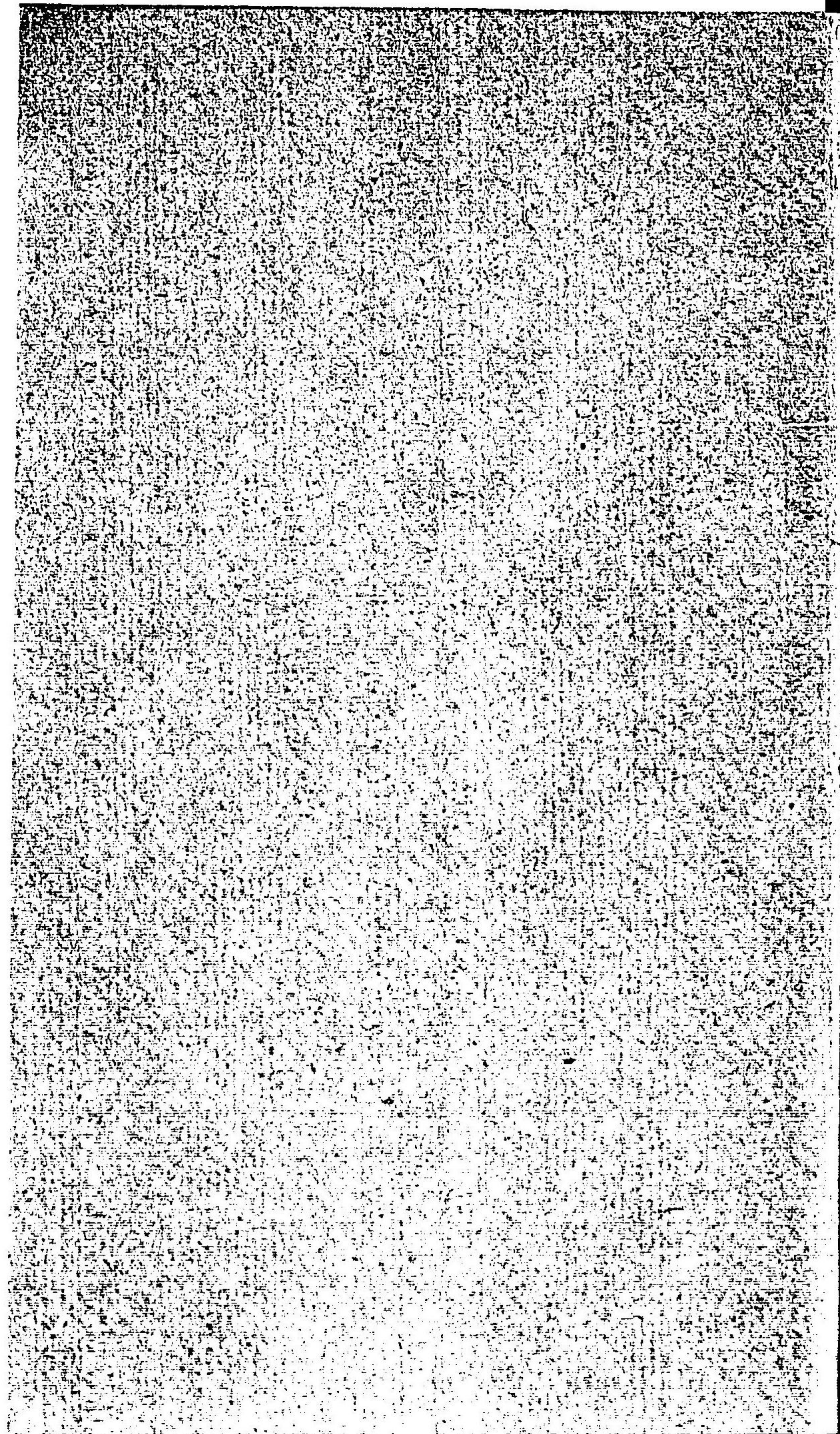
定價金四拾錢  
郵稅四錢

各國滑稽小説

定價金五拾錢  
郵稅六錢

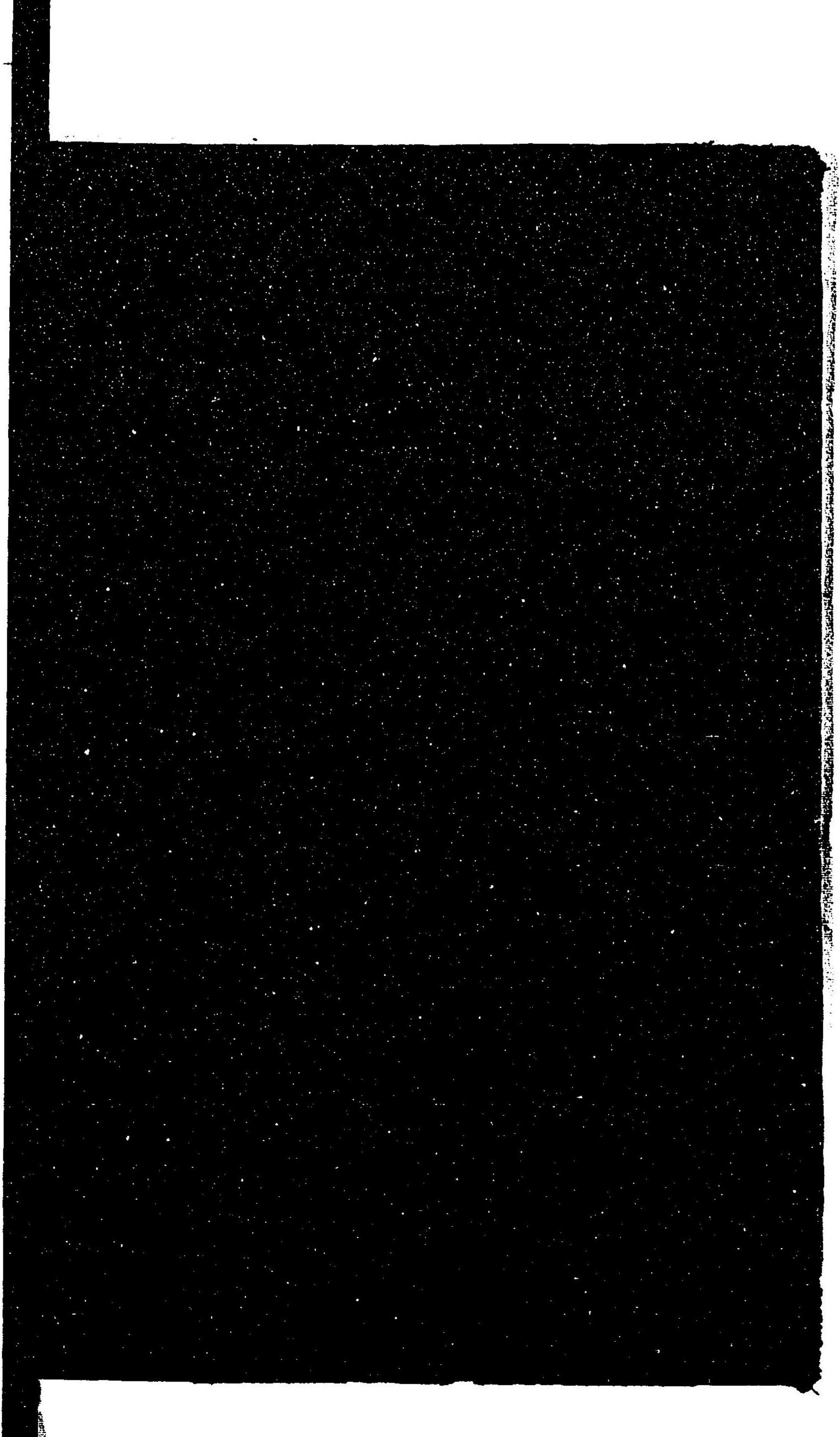
元版 東京東區芝罘町上駒三丁目一番地 東京貯蓄會 內出外版協會

825  
113



325

113



325  
113

|||

|||

020584-000-2

325-113

基督の模倣

トマス・ア・ケンピス/著

M43

ABI-0399



